

大分市

市内遺跡確認調査概報

—2005年度—

2006

大分市教育委員会

大分市

市内遺跡確認調査概報

—2005年度—

国指定史跡大友氏遺跡

中世大友府内町跡

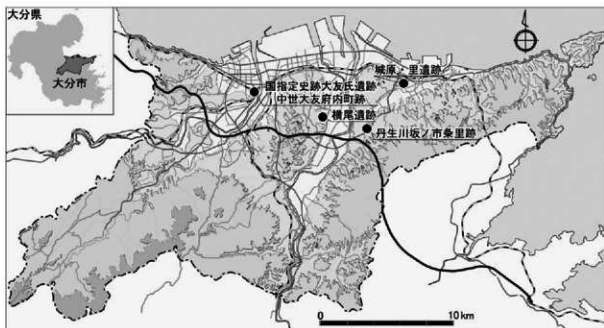
横尾遺跡

城原・里遺跡

丹生川坂ノ市条里跡

2006

大分市教育委員会



調査遺跡位置図

例 言

- 1 本書は平成17年度に大分市教育委員会が実施した市内遺跡確認調査の概要報告である。
- 2 本書には国指定史跡大友氏遺跡（大友氏館跡・旧万寿寺地区）、中世大友府内町跡、横尾遺跡、城原・里遺跡、丹生川坂ノ市条里跡の調査成果を収録した。
- 3 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
- 4 調査及び整理に伴う事項については、各遺跡の報告文中に記した。
- 5 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。
- 6 出土遺物、記録資料は大分市文化財資料室（大分市顕徳町3丁目2番43号）、横尾地区文化財整理室（大分市横尾2354）に収蔵、保管している。
- 7 本書の執筆ならびに編集は各調査担当者が行い、その取りまとめを中西が担当した。
- 8 調査体制については次のとおりである。

文化財課

課 長	佐 藤 功
参 事	玉 永 光 洋
課長補佐兼文化財係長	讃 岐 和 夫
管 理 係	管理係長 安 東 時 男
	主 査 平 野 勝 敏
	指導主事 後 藤 典 幸
	指導主事 姫 野 公 徳
	主 任 桑 原 治 之
	主 任 栗 田 博 之
	主 任 安 部 一 成
	主 任 加 藤 千 ヌ

文化財係

専 門 員	塔 鼻 光 司
主任技師	池 辺 千 太 郎
主任技師	高 畠 豊
技 師	中 西 武 尚
主 事	佐 藤 道 文
主 事	古 川 匠
嘱 託	梅 木 信 宏
嘱 託	衛 藤 亮 介
嘱 託	奥 村 義 貴
嘱 託	荻 谷 史 徳
嘱 託	仲 矢 咲 紀
嘱 託	羽 田 裕 之
嘱 託	姫 野 久 恵
嘱 託	松 尾 聡
嘱 託	松 田 幸 之 助
嘱 託	宮 田 剛
嘱 託	山 下 美 郷
嘱 託	若 枚 善 満

大分市歴史資料館

参事兼館長	木 村 幾 多 郎
課長補佐兼副館長	首 藤 公 洋
主 査	広 岡 道 代
主 査	安 部 幹 夫
主 査	武 富 雅 宣
主 査	長 田 弘 通
指導主事	甲 斐 猛
指導主事	佐 藤 充 弘
研修教諭	志 賀 良 史
嘱 託	堤 詔 司
嘱 託	荒 巻 雄 子
嘱 託	佐 藤 暁 美
嘱 託	古 瀬 美 鈴
嘱 託	寺 田 真 綾

専 門 員	坪 根 伸 也
主任技師	塩 地 潤 一
主任技師	河 野 史 郎
主 事	永 松 正 大
主 事	五 十 川 雄 也
嘱 託	井 口 あ け み
嘱 託	梅 田 昭 宏
嘱 託	荻 住 幸 二
嘱 託	小 佐 藤 武 史
嘱 託	羽 田 野 郎
嘱 託	服 部 達 真
嘱 託	古 部 智 之
嘱 託	松 竹 裕 子
嘱 託	水 町 晃 司
嘱 託	森 岡 本 哲 也
嘱 託	山 本 哲 也

目 次

国指定史跡大友氏遺跡 中世大友府内町跡

第1章	はじめに	
(1)	調査に至る経緯	2
(2)	調査組織	2
第2章	調査の概要	
(1)	大友氏館跡第16次調査	3
(2)	大友氏館跡第17次調査	6
(3)	大友氏館跡第18次調査	8
(4)	旧万寿寺地区第1次調査	11
(5)	中世大友府内町跡第33-2次調査	14
(6)	中世大友府内町跡第50次調査	16
(7)	中世大友府内町跡第54次調査	17
(8)	中世大友府内町跡第56次調査	19
(9)	中世大友府内町跡第58次調査	21
(10)	中世大友府内町跡第62次調査	24
(11)	中世大友府内町跡第64次調査	27
(12)	中世大友府内町跡第65次調査	29
(13)	中世大友府内町跡第66次調査	30

横 尾 遺 跡

第1章	はじめに	
(1)	調査に至る経緯	1
(2)	調査組織	1
第2章	平成16・17年度の調査概要	
(1)	横尾遺跡第94次調査	3
(2)	横尾遺跡第95次調査	3
(3)	横尾遺跡第96-2次調査	4
(4)	横尾遺跡第97次調査	5
(5)	横尾遺跡第100次調査	5
(6)	横尾遺跡第102次調査	9
(7)	横尾遺跡第103次調査	11
(8)	横尾遺跡第104次調査	13
(9)	横尾遺跡第105次調査	15
(10)	横尾遺跡第108次調査	15
(11)	横尾遺跡第109次調査	16
(12)	横尾遺跡第111次調査	17
第3章	まとめ	18

城 原 ・ 里 遺 跡

第1章	はじめに	
(1)	調査に至る経緯	1
(2)	調査組織	1
第2章	調査の概要（城原・里遺跡第9次調査）	3
第3章	まとめ	4

丹生川坂ノ市条里跡

第1章	はじめに	
(1)	調査に至る経緯	1
(2)	調査組織	1
第2章	調査の概要	2
第3章	まとめ	3

国指定史跡

大友氏遺跡

[大友氏館跡・旧万寿寺地区]

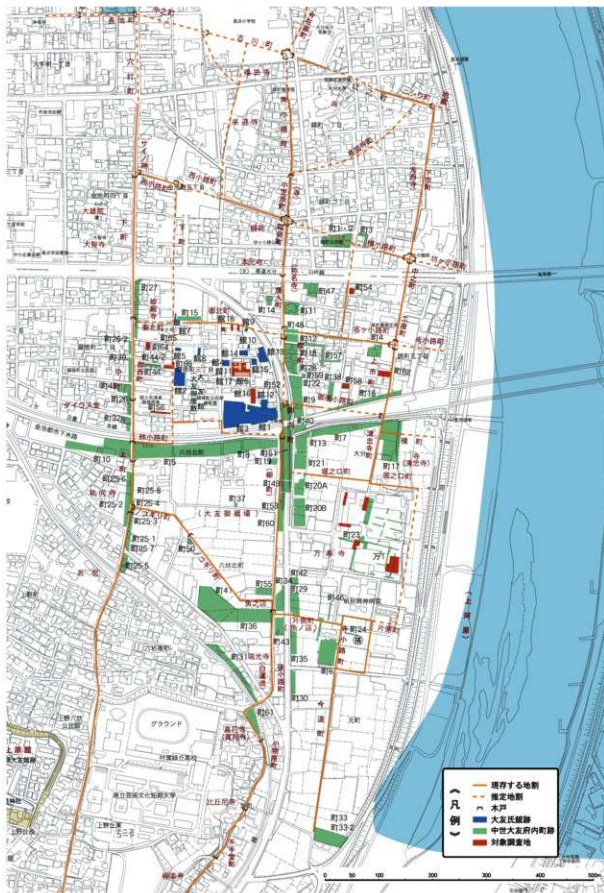
—発掘調査概報Ⅶ—

中世大友府内町跡



中世府内町の全景（上が北）

2006



第1図 これまでの中世大友城下町跡調査地点と府内復興想定図（1/8000）[2006改正]

例 言

- 1 本書は平成17年度に大分市教育委員会が実施した国指定史跡大友氏遺跡（大友氏館跡・旧万寿寺地区）、中世大友府内町跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査の費用は、国と県から補助を受けて、大分市が負担した。
- 3 調査および本書の編集は中西武尚、佐藤道文、松尾聡、若枚善満、仲矢咲紀、古田陽、衛藤亮介、山下美郷、服部真和が担当した。各章の執筆は、第1章を中西、第2章については文末に記している。また、「中世大友城下町跡」に関しては、県教育委員会調査分との整合をはかるために、市教委と合同の調査指導者を開催し、調査方法についても可能な限り共通理解の中で進捗させるように務めている。
- 4 遺構の写真撮影は、各担当者が行った他、㈱九州航空に一部委託した。
- 5 出土遺物の整理は、堀田清乃・安部真弓・川筋智栄子（大分市教育委員会文化財課臨時職員）が主としてこれにあたり、溝辺尚子・大西千春・西村大・木村藍子・古賀悦子（大分市教育委員会文化財課臨時職員）、近藤慎也・神田貞臣・若佐健二・石川優生・山本耕太郎（別府大学学生）の協力を得た。
- 6 本書に用いた方位はすべて座標北(G. N.)である。また、基準点の座標値は平面直角座標系第Ⅱ系による。
- 7 本書に用いた出土陶磁器・土師器の分類及び年代観は以下の文献による。
森田 勉「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 1982
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 1982
小野正敏「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 1982
乗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」『第2回中近世備前焼研究会資料』2000
乗岡 実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000
大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友城下町跡出土の土師質土器編年」『豊後府内』1 2005
大分市教育委員会「大友氏館跡北東部地区の遺構変遷と出土土師器」
『大分市市内遺跡確認調査概報-2004年度』2005
- 8 遺跡名に関しては、その構成要素である町屋部分を「中世大友府内町跡」とし、これに国指定史跡「大友氏遺跡」（平成17年3月2日名称変更）を加えた遺跡総体を「中世大友城下町跡」と呼称する。なお、「大友氏遺跡」は、「大友氏館跡」と大友氏の菩提寺である「旧万寿寺地区」の2つの総称である。
- 9 本書で使用した遺構標記は以下の通りである。
SD 溝状遺構 SE 井戸遺構 SK 土坑 SA 柵跡
SP 柱跡遺構 SF 道路状遺構 SX 性格不明遺構（整地層）
- 10 本書で使用した遺跡名の略記号は以下の通りである。
大友氏館跡－「館」 旧万寿寺地区－「万」 中世大友府内町跡－「町」
- 11 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。

館	16	SB	030
遺跡名	調査回数	遺構種別	遺構番号

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

本年度の大友氏関連遺跡の確認調査は、大友氏館跡－3地点、旧万寿寺地区－1地点、中世大友府内町跡－7地点を数える。

大友氏館跡の調査は、推定館南東部で確認された庭園跡北側の状況把握を目的とした調査[第16次調査]を昨年度から継続して実施した。また、推定館跡のほぼ中心部分において確認されていた大型建物関連遺構[第6・11次調査]の展開状況と範囲確認を目的とした調査[第17次調査]を実施している。さらに、推定館跡北側の中央付近において、以前の調査[第7・9次調査]でも確認されている館跡北側外郭ラインと考えられる溝跡など遺構群の展開状況の把握を目的とした調査[第18次調査]を実施した。

旧万寿寺地区については、平成14年度確認調査の補正に加え、遺構の展開状況の把握を目的とした調査[第1次調査]を実施した。

中世大友府内町跡－町屋部分に関しては、昨年度に引き続き、推定館跡西側付近でその西側の確定及び状況把握を目的とした調査[第56・65・66次調査]を実施している。この他、個人住宅の建て替えや共同住宅建設に伴い、中世大友府内町の全体像の状況把握を目的とした調査[第54・58・62次調査]を実施し、さらに立会いから遺構の確認調査に移行した第58・64次調査を実施した。大友氏遺跡以外の町屋部分については、可能な限り面的な調査を実施するように努めてきたが、今年度に関しては、期間的な兼ね合いなどから調査は必要最小限の範囲にとどめて実施している。

(2) 調査組織

調査指導者	河原 純之（川科学園女子大学教授）			
	後藤 宗俊（別府大学教授）			
	小野 正敏（国立歴史民俗博物館助教授）			
	坂井 秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）			
	渋谷 忠章（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）			
調査指導	大分県教育委員会			
調査主体	大分市教育委員会 教育長 秦 政博			
調査担当	文化財課			
	坪根 伸也	中西 武尚	佐藤 道文	
	古田 陽	松尾 聡	若松 善満	衛藤 亮介 仲矢 咲紀

発掘調査従事者

安東 隆司	安倍 美紀	安部 康子	伊藤 輝喜	池辺 徹子	梅木 好子	植木エミ子
大久保覚至	小田小夜子	神崎 貴美	梶原 利通	久保田由紀子	工藤 優子	児玉 繁敏
後藤 文子	近藤 慎也	佐藤 恭子	秦 國利	秦 二月	高木美知子	高橋 抄子
霍間 幸子	中野 聖子	那賀 貴子	長岡 照実	西田 榮治	西田 勝子	丹生 純嘉
藤野 哲之	前田 恵子	升永 ゆり	増本 文子	三浦 博子	三浦 陽子	三重野 夜
元木 敬一	森 福生	山下三枝子	山本耕太郎	柳井 治夫		

整理作業従事者

堀田 清乃

第2章 調査の概要

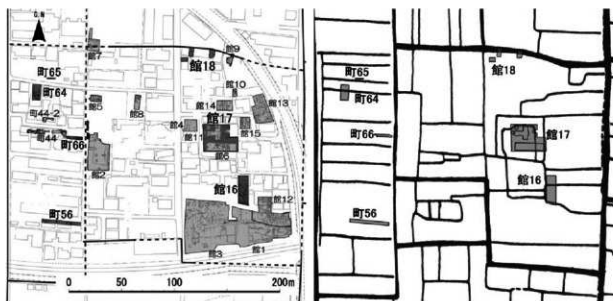
(1) 大友氏館跡 第16次調査

第16次調査区は、推定大友氏館跡の南東部付近で、庭園跡北側に位置する。庭園跡北側の状況把握を目的として昨年度から継続して調査を実施している。調査の結果、調査区北側では、予想通り表土直下(標高約4.9m)で遺構が検出できた。南側は第12次調査で確認されている水田跡[館12SX040](18世紀)のつづきである水田跡[館16SX020]を確認しており、これより南は一段低くなる(標高約4.2m)。調査区北側において検出された遺構群(建物跡[館16SB025]、礎石列[館16SA030]、溝状遺構[館16SD005・040]、土師器集中遺構[館16SX001・002・010]、整地遺構[館16SX045・065]、その他遺構[館16SX035・065])については昨年度報告済みであり、今年度の調査により新に検出された遺構について記す。検出した遺構には、溝状遺構[館16SD090]、土坑[館16SK095]、大型集石遺構[館16SX075]、長土坑状遺構[館16SX100]、掘り込み整地状遺構[館16SX080]、土坑状遺構[館16SX101・102]、その他ピット群[館16SP067・106・107ほか]などがある。

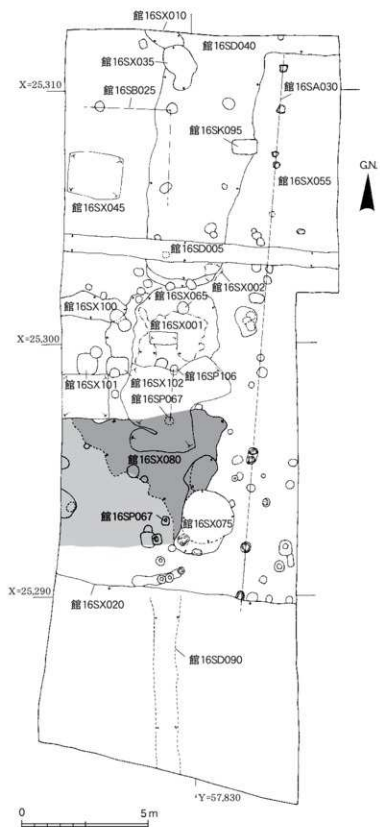
館16SD090は、調査区の南側—館16SX020で掘削された下面で検出した南北に延びる溝状遺構である。幅約1mを測り、埋土にはよく締まった黄褐色粘質土が堆積している。ほぼ真北に延びていくが、北側の一段高くなった検出面では確認できず、北側の整地層[館16SX045・055]によりバックされているものと考えられる。このことから15世紀中葉～後葉以前の所産時期が考えられる。

館16SK095は、調査区北側で検出された土坑で、近世以降の畑の畝状遺構を掘下げた段階で確認された。このため館16SD040との直接的な新旧関係は不明であるが、出土遺物に厚手の京都系土師器がみられることから16世紀後葉頃に位置付けられる。埋土内には、拳大の礫が多く含まれ、特に東側に集中している。現状では遺構の性格を礫の出土状況などから廃棄土坑と考えておく。

館16SX075は、直径約2mを測る円形的大型集石遺構である。埋土は玉砂利を含む砂利層で、その下部から礫が検出される。検出された礫は、遺構周囲に拳大の礫が充填され、中央部分は人頭大の礫が面をそろえるようにして配置されている。井戸跡の可能性も考えられるが、意図的に礫が配置されていることは注目される。時期については、ロクロ目土師器の破片が出土していることから16世紀前葉頃に比定されるが、詳細な時期については不明である。



第2図 大友氏館跡周辺調査位置図と明治初期の地籍図



第3図 館16次調査区遺構配置図 (1/150)

館16SX080は、館16SX001の南側で検出した砂質土が広範囲に広がる浅い掘り込み遺構である。館16SX075の北側で掘り込みのプランを確認しているが、南西部分については後世の削平によりその範囲は不明である。しかしながら、館16SX075を南東隅にして方形に広がっていたものと考えられる。このことから館16SX080と館16SX075は、互いに関連する遺構である可能性が高い。

館16SX100は、館16SX001の西側で検出した長土坑状の遺構である。遺構は調査区西側にさらに延びており、その規模は不明である。現状で浅い掘り込みの埋土の中には、焼けた土がブロック状に含まれている。さらに、カマドなどの壁と考えられるよく焼けた粘土壁が出土しており、火を使用する施設であったと考えられる。詳細については、遺構の遺存状況がよくないことから言及できず、時期についても出土遺物がほとんどなく不明である。

館16SX101・102は、館16SX100の南側で並列して検出した隅丸方形の土坑状遺構である。一辺約0.8mを測り、深さは現状で約0.1mと浅い。埋土は淡灰茶色シルト質土で、比較的締まっている。出土遺物もなく時期・遺構の性格とも不明であるが、先の館16SX100の南側で平行した位置関係にあることからそれとの関連性が考えられる。

この他、柱痕をもつ柱穴などもいくつか検出したが建物跡は確認できなかった。館16SP106・107の2基の柱穴については、規模・埋土の状況などから一連のものと考えられ、柱間約2mで展開するものと想定したが、他への延びは確認できなかった。

今年度検出された遺構のほとんどが遺構の性格・時期ともに不明なものが多く、今後の周辺の調査を重ねていくことで、各遺構の全体的な位置関係などを基に検討していく必要がある。

(中西 武尚)



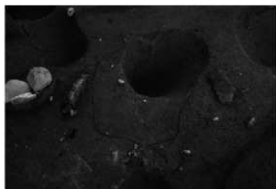
館16SK095礫検出状況（北より）



館16SX075礫検出状況（北より）



館16SX080土層観察状況（北より）



館16SX100遺構検出状況詳細（南より）

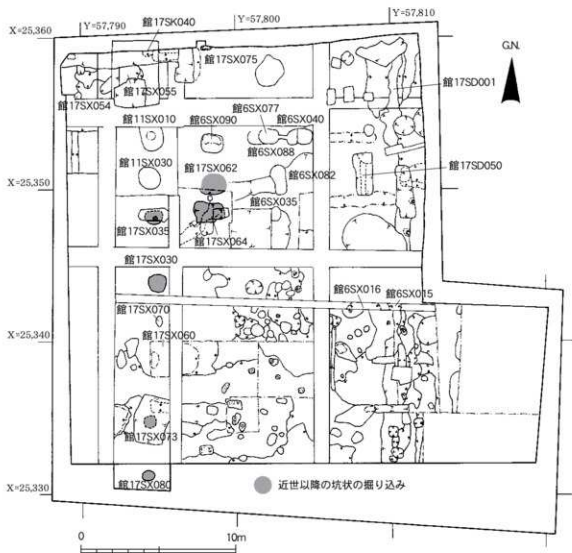
(2) 大友氏館跡 第17次調査

第17次調査区は、以前の調査(館6・11次調査)において確認されている大型建物関連遺構の展開状況と範囲把握を目的とし確認調査を実施している。調査地は、推定大友氏館跡のほぼ中心に位置し、推定主殿部分に比定されている地区である。この地点は明治時代初期の地籍図でみると、コの字状の不自然な地割りがあり、その内側の方形地割りにあたる。調査地は現状で周辺地よりも高くなっており、現地表面の標高は高いところで約5.3mを測る。これより約0.4～0.5mの間は耕作土が堆積している。この耕作土の直下(標高約5.0m)に中世段階の遺構群が検出され、同時に近現代の大きなゴミ穴(擾乱)も確認される。これら耕作土と擾乱により、中世段階の遺構群は多少の削平をうけている。また、調査区東側では江戸時代以降のものと考えられる水田跡が確認されており、この水田層より東側は大きく落ち込んでいる。さらに西側についても、以前の調査成果(館4次調査)から現私道から西側は水田耕作により大きく落ち込んでいることが確認されている。

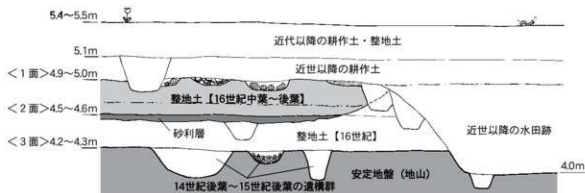
検出された遺構には、盛土状の整地遺構、大型建物関連遺構[館6SX035・040・050・074・077・082・088・090、館11SX010・030]、溝状遺構[館17SD001・050]、土師器廃棄遺構[館17SX040・054・055・075]、土坑状遺構[館17SX030・035・062・080]、その他[館17SX060・064・070・074]などがある。以下、盛土状の整地遺構と大型建物関連遺構について記す。

盛土状の整地遺構は、現状の基壇状の高まりを形成しているものであり、基底部(下部の安定地盤[地山])＝標高約4.2～4.3m)から約0.8mの厚みで確認されている。この整地土は標高約4.5m前後で面的な広がりをもつ砂利層によって大きく2つに分かれる。上部の整地土は調査区東側部分について、土層観察により立ち上がりを確認でき、掘り込み地業による整地土であることが確認された。現時点ではその他の南北西側の掘り込みプランは確認できない。この整地土の上面から大型建物関連遺構や他の遺構群が検出されている。整地遺構の時期については、整地土にバックされた下部安定地盤(地山)で、14世紀後葉～15世紀後葉頃に比定される遺構群[館6SX015・016、館17SD050]が検出されることからこれ以後に位置付けられ、さらに下部の整地土からはクロロ目土師器片が出土しており、16世紀前葉以降に整地されたものと考えられる。この下部の整地土については、その範囲は確認されていない。

大型建物関連遺構は、礎石建物の根石になるものと考えられ、この上に礎石が置かれていたと考えられる。昨年度調査を実施した館15次調査では、16世紀末頃(島津氏の侵攻後に位置付け)に機能・廃絶した井戸跡[館15SE018]の井筒内に礎石と考えられる巨石が4個廃棄されており、時間的に同調査地から運ばれた可能性が指摘できる。また、過去の調査の表土はぎ段階でも礎石と思われる巨石がみつかっており、一つには確実に柱が建てられていたアタリの痕跡も確認できる。大型建物関連遺構は、これまでの調査で現状、東西方向に4基、南北方向に2基検出している。東西方向のものでは、約1.2m以上の掘り方で確認されているが、以前の調査所見から何度かの建て替えの状況が確認されており、本来はもう少し規模が小さくなるものと考えられる。現状、任意中点での柱間は西側2間が約3.6mを測り、東側の1間は約2.2mと規模を小さくしている。東側の1間については、庇あるいは広縁といった構造になると考えられようか。南への展開状況は、近世以降の耕作により、北側で確認されたような明確な根石の跡は確認されず、部分的に根石と考えられる礎の散らばり[館17SX060]や大型の根石とは異なる小規模な玉砂利などを充填したビット群などが展開しているのみである。しかしながら、近世以後の土坑状の掘り込み[館17SX030・035・062・080]の展開状況を見ると、確認されている建物関連遺構の現状の西端で、南側に並んでいる状況がうかがえ、近世以降の耕作等に伴う礎石の抜き取り痕跡である可能性も指摘できる。南側の遺構の状況から建物遺構自体もさらに南側に展開しているものと考えられ、当時のメインストリートと考えられる第二南北道路路側を正面とした建物になると推定される。今後、さらなる南側への展開状況を確認すると共に、現在検出している遺構群との時間的な位置付けを整理し、検証していく必要がある。(中西 武尚)



第4図 館17次調査区遺構配置図 (1/250)



第5図 館17次調査区土層模式図

(3) 大友氏館跡 第18次調査

第18次調査地点は、大分市大字顕徳町3丁目4403-10ほかの旧朝久野学園女子専門学校跡地にあたり、「戦国時代の府内復原想定図」の推定御北町の南側、推定大友氏館跡の北側外郭線上に位置する(第2図)。推定大友氏館跡北側外郭線の中心部の状況を確認する目的で調査区を設定した。当該地域は、現地表面において旧建物基礎が確認できる状況であったため、調査目的に沿う調査地北側の掘削を受けていない基礎の中央部2ヶ所(東からa区・b区)と北側外郭線の南側の状況を確認するためにc区を設定した(第6図)。調査区の各面積はa区が約21.6㎡、b区が約23.1㎡、C区が約15.4㎡を測る。

各調査区内の基本層序は、旧建物基礎を伴う表土および客土→暗灰茶色粘質土→褐灰色粘質土→茶灰色砂質土→暗茶灰色砂質土→黄茶色シルト→黄茶色砂に大別される。調査地は前述したように、旧建物跡基礎により分断され、また後世の水田開発により、大部分が削平を受けている状況にある。暗灰茶色粘質土および褐灰色粘質土は、近世以降の水田耕作土とその床土にあたる。茶灰色砂質土および暗茶灰色砂質土は、上層の水田層に係る近世の整地層と考えられる。a区・b区においては、中世の整地層はみられず、調査区内北側に積土の一部が観察され、黄茶色シルトから基盤層である黄茶色砂にかけて東西方向の溝状遺構が掘り込まれる。c区においては、中世の整地層が広がり、この層から南北方向の溝状遺構が基盤層である黄茶色砂まで掘り込まれる。今回の調査で確認された遺構の検出標高は約3.9～4.0mである。以下、各調査区の概要について記す。

a区においては、3条の東西方向の溝状遺構[館18SX017・館18SD019・館18SD020]および積土遺構が検出された。館18SD019は、館18SD020によって掘り返され、また館18SX017も館18SD019の北側立ち上がり掘り込みが、館18SD020と館18SX017の上面は、旧建物基礎によって削平されており、その新旧関係は不明である。館18SD020は、深さ約1.1mを測る。埋土には多量の礫が含まれていた。遺物は漳州窯系青花片などが出土しており、16世紀後半に比定される。館18SX017は、断面形状が不整形ながら下部が東西方向にのびる溝状を呈する。館18SD019の北側では、シルト・砂・シルトと積み上げられ各層が硬く締まった積土遺構が観察されており、溝内に積土の一部と考えられる黄茶色砂の流れ込みが認められることから、館18SD019と積土遺構は併存していた可能性が考えられる。

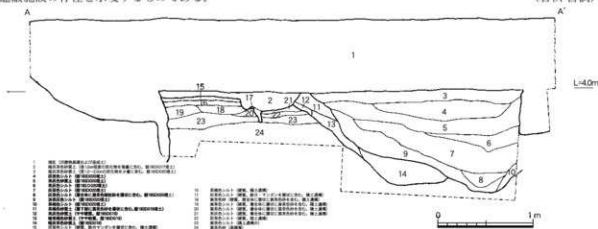
b区においては、2条の東西方向の溝状遺構[館18SD015・館18SD018]・土坑[館18SK005]・不明遺構[館18SX024]が検出された。館18SD015は、深さ約1.0m、幅2.4mを測る。館18SD018は、深さ約0.9mを測り、断面形状がV字状を呈している。館18SD018は、館18SD015を掘り込む。位置関係から館18SD015・館18SD018は、それぞれa区で検出された館18SD019・館18SD020に対応するものと考えられる。館18SD018からは、焼けたスサ入り粘土塊が出土している。館18SD015・館18SD018の北側では、明確な積土の状況は観察されなかった。しかし、館18SX024は東西方向に延び、その埋土には小礫および粗粒砂が集中する箇所が検出されたため、積土に関連する遺構の可能性がある。館18SK005の埋土は軟質に近く、館18SX024を掘り込む。

c区においては、中世の整地層[館18SX011・012・013・014]・溝状遺構[館18SD010]・方形ピット[館18SP022]が検出された。近世において、水田層の下面を安定させるために行われたと考えられる整地層(茶灰色砂質土・暗茶灰色砂質土)下に、中世の整地層[館18SX011・012・013・014]が、20～40cmの厚さで現存する。この整地層は、大きく西側から砂質土→シルトの順に土が入れられている状況が観察された。遺物は少なく、薄手の京都系土師器片や瓦片を含み、その時期は16世紀中頃～後半と推定される。調査区西側においては、中世の整地層から基盤層である黄茶色砂まで掘り込み南北方向に延びる溝状遺構[館18SD010]が検出された。深さは約0.8m、幅は約2.6m程度と推定され、緩やかに立ち上がる逆台形状を呈している。溝の最下層である茶褐色シルト層から交差層目の備前焼埴鉢が出土しており、その時期は16世紀後半～末に比定される。

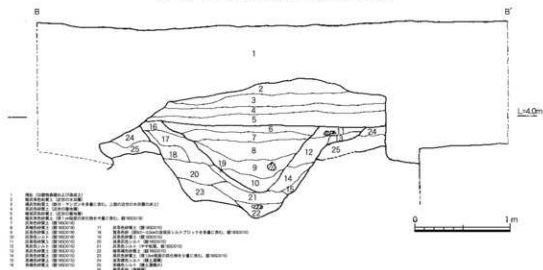
まとめ

大友氏館跡の北限については、推定大友氏館跡の北西部の第7次調査において、館の北側を区画すると考えられる東西溝跡またそれに伴う積土遺構と北東部の第9・10次調査区において、東西方向に延びる溝状遺構が確認されている。それらの調査区に間に設定された今回の調査区からも同時期と考えられる東西方向の溝とそれより古い段階の積土遺構とそれに伴う溝が検出されたことにより、推定大友氏館跡北側外郭線のライン確定にさらなる傍証が加えられた。また、溝状遺構から出土したスサ入り粘土塊は、溝に伴う積土遺構の上部の区画性をもつ遮蔽施設の存在を示唆するものである。

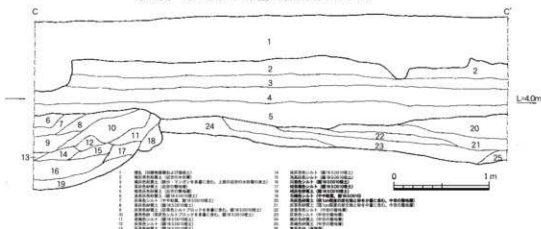
(若牧 善満)



第7図 館18次a区東壁土層断面図 (1/40)



第8図 館18次b区東壁土層断面図 (1/40)



第9図 館18次c区北壁土層断面図 (1/40)

(4) 田万寿寺地区 第1次調査

今回の調査は、重要遺跡確認調査として推定万寿寺境内内(九州乳業工場跡地)の遺跡の状況確認を主たる目的として実施している。調査区はA～E区(第10図)の5地点に分かれている。調査期間は、2005.11.01～2006.01.27である。

調査の結果、A・D・E区で工場建物建造に伴う基礎跡が攪乱穴として認められ、何れも遺構確認面を破壊し、地山層まで到達していた。その一方で攪乱による破壊を受けていないその他の箇所については、遺構の残存状況は総じて良好であった。以下、各調査区の概要について記述する。

A区

工場跡地内の南東部に設定し、面積は約170㎡、検出標高は約5.3mである。主要遺構は、瓦溜り遺構[万1SX005]、大型土坑[万1SX008]、溝状遺構[万1SD015・020・025]などである。万1SX005は、中央部において検出した。東・西・北側を攪乱により削平されているため全容については不明である。残存規模は長辺約3.2m、短辺約1.6m、深度約0.3mを測る。遺構の性格に関しては、南側ラインがある程度揃っている点、基盤層(地山)が砂質土で脆弱であることから地盤強化等を目的となされた行為と考えることができる。所産時期については遺物の大半が瓦であり、時期決定可能な資料が出土していないため不明である。万1SX008は残存形状より径約3m、深さ約0.3mを測る不定形の土坑状の遺構である。遺物は焼締陶器や土師器・瓦などの小片が出土しているが、所産時期を示すような資料は出土しなかった。万1SD015・020・025は何れも東西方向に延びる溝状遺構である。万1SD015は検出幅約2m、深さ約1.1mを測り、断面形状はV字形を呈する。埋土中から白色系土師器片が出土していることから15世紀代の所産であるといえる。万1SD020は、万1SD025を掘り込む溝状遺構である。万1SD020は検出幅約1m、最大深度約0.9mで断面形状は逆台形を呈する。また、西側部分を攪乱穴により削平されているが、規模及び埋土・断面形状より万1SX005下層に存在する溝状遺構に接続するものと考えられる。万1SD025は検出幅約1.9m、深さ約0.8m、楕円状の断面形状を有する。土層観察より2回の掘り返しの痕跡が認められる。所産時期については、白色系土師器片が出土していることから15世紀代であると思われる。

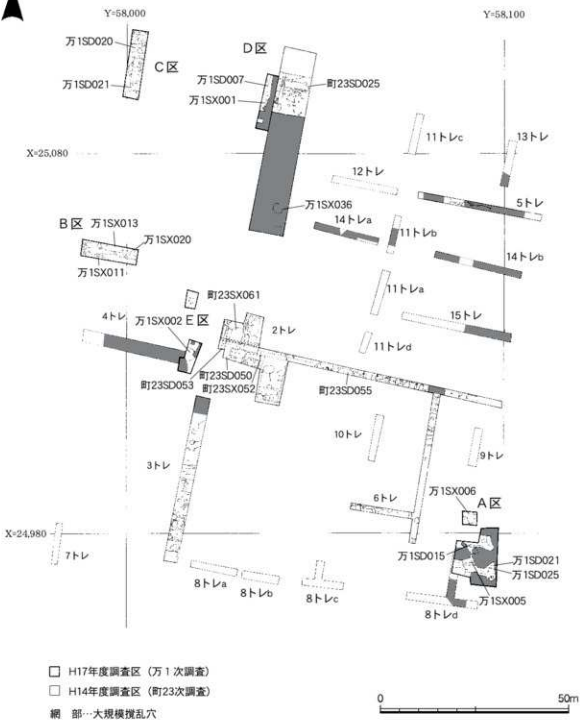
B区

中央西側に設定したトレンチで、調査面積約56㎡、検出標高約5.2mである。主な遺構は東西方向に展開する万1SX011・013・020である。万1SX011は、南壁付近で確認した残存規模幅約1.6m、深度約0.5mをはかる遺構である。埋土は灰褐色土を基調に黄褐色のブロック土を全体に内包する。埋土中からは厚手の京都系土師器皿が出土しており、16世紀後半以降に比定される。万1SX013は、調査区北側において検出した。規模約1.0m、深さ約0.5mを測り、埋土は万1SX011と同様にブロック土を均一に含む。時期については環形断面の京都系土師器が出土していることから、16世紀後半～未段階に比定される。万1SX020は、万1SX013に掘り込まれる遺構である。平面形状は残存部より長楕円形を呈するものと考えられる。残存規模は、長辺約2m、短辺約1.6m、深さ約0.5mである。埋土は先述した2遺構と同様にブロック土が混ざっている。出土遺物には京都系土師器皿があり、その形態より16世紀後半以降の所産に位置付できる。

C区

対象地内北西に設定したトレンチで、調査面積約70㎡、検出標高約5.1mである。主要遺構は溝状遺構[万1SD020・021]である。両遺構とも東西方向に延びるもので、全体の規模及び形状については調査区外に展開するため不明である。両遺構とも検出幅約1.6m、深さ約0.5mを測り、断面形状は逆台形を呈する。所産時期に関しては両遺構ともに瓦質土器・土師器・焼締陶器などが出土したが、時期を特定するには至らなかった。

GN



D区

第10図 トレンチ配置図 (1/1000)

前回調査(町23次調査)の第1トレンチの西側に設定した。調査面積約60㎡、検出標高約5.2mである。調査区中央部から南側にかけては擾乱により掘削されていた。主要遺構は、万1SX001、万1SD007である。万1SX001は東側を擾乱により削平されているが、残存部より推定すると平面形状は長楕円形を呈するものと考えられる。残存規模は長辺約0.7m、短辺約0.5mを測り、深さ約0.5mである。出土遺物には古備系土師質土器椀(14世紀前半)や在地系土師器坏が出土しており、その形態より14世紀後半～15世紀初頭に比定できる。万1SD007は万1SX001に切られる遺構で、黒色土器椀(A類)や土師質土器が出土している。

E区

工場跡地の中央やや西寄り、第2トレンチ(前回調査トレンチ)の南西に位置する。調査面積は約32㎡、検出標高約5.1mである。検出された遺構には万1SX002がある。形状については、残存部より長楕円形を呈するものと思われ、長辺約3.4m、短辺約2.2m、深さ約0.5mを測る。埋土は暗灰褐色土をベースに、黄褐色土をブロック状に包含する。埋土中からは瓦や土製磚、土師器、須恵器などが出土しているが、時期を特定するには至らなかった。



調査区全景(北が上)

まとめ

今回の調査では、万1ASX008、万1BSX011・013・020、万1ESX002で大型の土坑状遺構を数基確認した。万1BSX011・013・020は、遺構深度・埋土や遺物に差異が認められないことから掘削から廃絶の一連の過程がほぼ同時期に行われた可能性がある。遺構の性格は土採り穴などの可能性が考えられるが現状では不明である。万1SX008・002に関しても平面形状・埋土などの状況から先の3遺構と同様の性格を有していたと考えられる。A区では、東西方向に延びる溝状遺構(6条+α)を確認した。前回調査時(町23次調査)の第3トレンチで東西方向に展開する溝状遺構(7条+α)が検出されており、今回確認した溝状遺構と同一のものである可能性が考えられる。また、防御性の高い断面V字を呈する溝状遺構[万1SD015]や地盤強化と推定される瓦溜り[万1SX005]の存在などから、当調査地周辺には溝で区画され防御機能を意識した施設が構築されていた可能性が指摘できる。D区は、推定第一南北街路跡の延長線上に設定したトレンチである。当トレンチは道路状遺構の有無を第一義に調査したが、結果的には道路と思われる土層の堆積は認められなかった。これより万寿寺推定地内には、第一南北街路が存在しないことが確認され、第一南北街路は万寿寺創建後に施行された街路であるという所見を迫ることになったといえる。また、前回調査で確認された万寿寺創建段階の溝跡[町23SD025]の延長は確認できなかった。このことから当溝跡は、D区東側擾乱部分で閉塞するか南北どちらかにクランクするものと推定される。

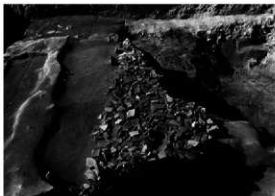
今回の調査は結果的にトレンチ調査になってしまった。今後はある程度広い面積を調査しなければ、万寿寺境内の建物配置や伽藍配置を含めた遺構の解明は難しいと思われる。

(松尾 聡)

<参考文献>

大分市教育委員会 2001 『大友館跡－発掘調査概報Ⅱ－』

大分市教育委員会 2003 『大分市市内道路確認調査概報－2002年度－』



万1SX005遺物出土状況(東より)



万1SD015土層観察状況(西より)

(5) 中世大友府内町跡 第33-2次調査

町33-2次調査区は平成15年度に実施した町33次調査と同一地点である。前回、開発計画が持ち上がったが、その確認調査の内容から計画の見直しが図られた。今年度、再度個人住宅建築の申請が行われ、数回にわたる設計会社と文化財課の協議の結果、基本的に遺跡の大部分を盛土保存することで合意が得られた。しかし、建物の構造上、基礎杭が入る一部については遺跡が破壊されるおそれがあることから、確認調査を実施することが必要となった。基礎杭は部分的であり、消滅するおそれのある遺構は小面積であるが、地権者の協力のもと調査は面的に広範囲に行うことができた。

今回は調査区を東西方向に縦断する溝状遺構[町33SD010]・柵跡などが検出されている。だが、その時期等については不明な点が多く、今回の調査ではその解明を目的として行っている。町33SD010は底面から在地系土師質土器が出土しており、その形態的特徴から15世紀段階に位置付けられると思われる。また、清理土中位より、在地系のクロロ目をもつ土師質土器破片が確認されることから、15世紀代に掘削が行われ、短期間のうちに埋没していると考えられる。町33SD010の底面に一辺約1.2mの平面方形を呈す土坑が検出された。本遺構の東側に同様の遺構が展開することを想定し、掘り下げを実施したが確認されなかった。

調査区西端では南北方向に延びる溝状遺構がみつまっている。その位置関係から旧万寿寺地区につながる道路跡に付随する側溝の可能性が考えられる。出土遺物をみると15世紀後半から16世紀前半の範疇におさまることから、現状ではその時期に埋没していると推測される。

本調査区の中央付近で16世紀段階のものと思われる掘立柱建物跡、柱穴列(礎石含む)が確認されている。町33-2SB070は2間×4間を呈す東西棟で、町33SD010を掘り込んで形成される。町33-2SA050・060は、町33-2SB070に直交する状態で確認され、柵跡もしくは回廊などの施設が推測される。この柱穴列は約1m間隔で並列しており、規模、埋土の状況から同時並存していた可能性が高い。

確実に16世紀後半～末段階に比定される遺構は町33-2SK020・023・110、町33X018などの廃棄を目的とした大型の土坑のみである。その中で町33SX018からは朝鮮王朝産青磁香炉、中国産?黒軸陶器壺、備前焼花掛け入れなどが出土しており、遺物組成の在り方について注目される。

今回の再調査では、15世紀段階に東西溝(町33SD010)が掘削され、15世紀後半には埋没、そして、南北溝(町33-2SD035・075)が造られることが分かった。その南北溝も埋まった後、建物(柱穴列)が構築され、最終段階では本調査区は廃棄の場となる。「府内古図」に描かれていないエリアについても戦国期の遺構が存在することが判明し、中世府内町の広がりを示す重要な所見が得られた。

(佐藤 道文)



調査区周辺遠景 (上が西)



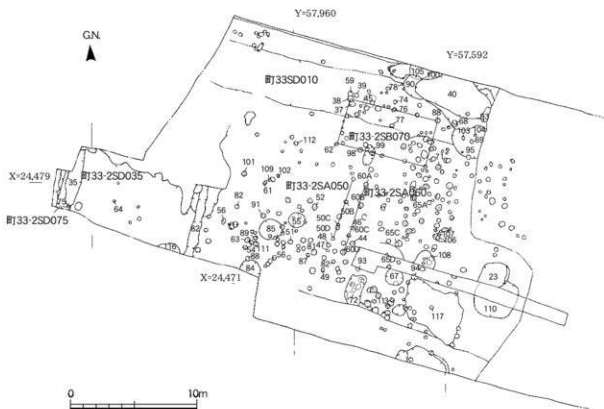
調査区周辺遠景 (上が北)



調査区全景（下が北）



町33SD010掘り下げ状況（西より）



第11図 第33-2次調査区遺構配置図 (1/300)

(6) 中世大友府内町跡 第50次調査

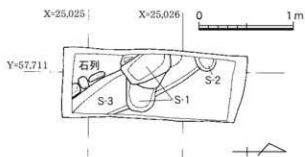
中世大友府内町跡第50次調査は大阪市六坊北町に位置し、「戦国時代の府内復原想定図」によれば「御藏場」の南西側にあたる「ノコギリ町」の街路が想定されている場所である。調査面積は約1㎡と狭い状況であったが、道路状遺構とそれに伴う側溝・石列・柱穴などの遺構群が確認された。

道路状遺構は、砂と砂利が薄く相互に積み重なっており、それが約10cmの厚みをもって堆積し硬化している。これに対し、砂と砂利の混じった硬化していない埋土が約40cm幅で帯状に認められ(S-3)、これに並行するように掌大の川原石を一列に並べた石列が検出された。柱穴(S-1)は、道路状遺構の上面から掘り込まれており、平面形状は隅丸方形に近く、長辺は約50cmである。柱穴の底には根石と思われる掌大の礫がまとまって検出された。埋土中からは京都系土師器皿片・鶴の線刻入り瓦質の火鉢ないし香炉が出土している。時期は16世紀後半から末段階と考えられ、道路状遺構が機能していた下限年代を考える判断材料である。

本調査区は、調査面積が極めて狭く制約があったが、先に述べた「ノコギリ町」の街路を確認し「戦国時代の府内復原想定図」を追認できたことは重要な成果であった。(服部 真和)



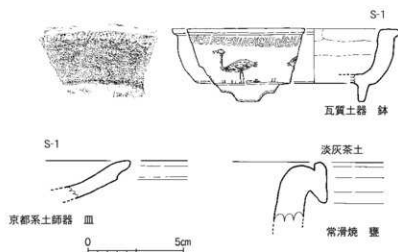
第12図 調査地点位置図 [復原想定図部分]



第13図 町50次調査区遺構配置図 (1/40)



調査区全景 (南より)



第14図 出土遺物実測図 (1/2)

(7) 中世大友城内町跡 第54次調査

調査は、中世大友城下町跡内において個人住宅の建て替えの申請があり、今回新築される建物の構造から地下の埋蔵文化財に影響を与えることはないと判断された。しかしながら、申請地は中世大友城下町跡の全体像を解明する上でも重要な地点であり、地権者の同意と協力の元、建物に影響を及ぼさない範囲での確認調査を実施した。

調査地は、通称第一南北街路・第二南北街路の両南北道路と、それらに直交する横小路・名ヶ小路の両東西道路に囲まれた区域のほぼ中央に位置する。この区域の西側は、第二南北街路に面して推定称名寺に比定されており、その寺域の東側には、南北方向の道路が想定されている。周辺の調査(町1～3次調査)の所見から推定地点では道路跡が確認されておらず、現時点では推定よりもさらに東側に南北道路が想定されている。この地点は明治初期の地籍図でみると、名ヶ小路町のほぼ中央で南北方向の短冊状地割りが確認できるその北側の方形地割りの一角にあたる。これよりさらに東側は、中之町・工座町の比定されている地区である。

現在の想定では、調査地のすぐ西側の現道の下辺りに南北道路跡が所在する可能性が考えられ、この現道際まで東西方向に幅約1m、長さ約6mのトレンチを設定し調査を実施した。

現地表面は標高約5.1mを測り、それより深さ約0.9～1.0mは、現代の宅地造成土などの客土が見られる。造成土は西側から東側に深く掘削しており、トレンチの東側では淡黄灰色シルト質土の安定地盤(地山)まで掘り込まれている。この客土の下位(標高約4.2m)から中世の遺構・遺物が検出された。検出された遺構には、整地層とそれに切り込む柱穴群などがあるが、調査区の制約上、遺構の展開状況については不明である。また、今回の調査区内では、想定されている道路の痕跡を確認するには至らず、調査区よりも西側に展開する可能性が示唆される。

今回の調査では、調査区を拡張することができず、遺構の性格や時期について詳細は不明であるが、整地層とそれに切り込む柱穴群が展開する状況から、調査地は町屋域の建物部分に相当する箇所と考えられる。

(中西 武尚)



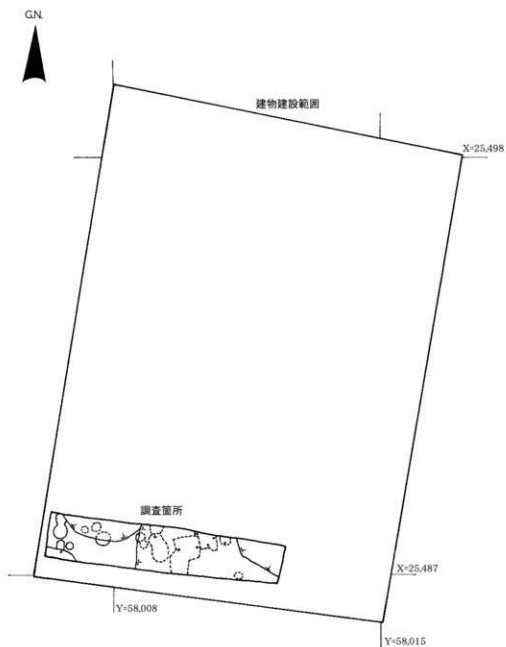
第15図 調査地点位置図 [復原想定図2005部分]



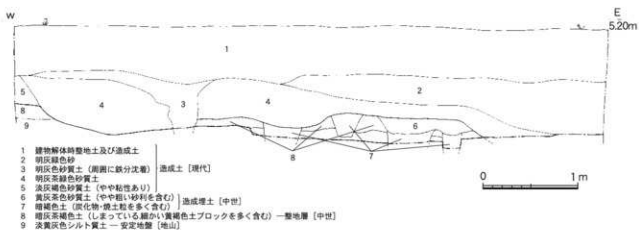
第16図 調査地点位置図 [明治初期の地籍図部分]



調査区全景 (東より)



第17図 町54次調査区遺構配置図 (1/100)



第18図 町54次調査区北壁土層図 (1/40)

(8) 中世大友府内町跡 第56次調査

調査は、大友氏館跡の西側外郭線の確定を目的とし、推定外郭線の西側に位置する国土交通省の宿舎駐車場部分について、各関係機関・関係者のご理解とご協力のもと確認調査を実施した。

調査地は、推定大友氏館跡の南西隅の西側に位置し、推定御西町に比定されている地区である。この地点は明治時代初期の地籍図でみると、推定館西側外郭線と第四南北街路跡の間の大きな方形地割りの一角にあたる。周辺調査(町44・44-2次調査)の所見から今回調査区を設定した東側付近に、館の西側を区画する施設、あるいは推定されている南北道路が想定されていた。

調査は推定ラインから約2mの空間(住民の通路確保)をあけて、東西方向に長さ約36m、幅約2mのトレンチを設定して実施した。途中、調査の必要性から推定ラインの際まで拡張を行い追加調査している。

調査の結果、調査区の大部分が当宿舎の建てられる以前の工場のコンクリート基礎(厚さ約0.8m)で覆われており、その下部の遺構確認をするには至らなかった。しかしながら、工場基礎の無い調査区東端では、一部掘削により破壊されているものの重要な調査所見を得ることができた。

調査地の現地表面の標高は約5.1mであり、そこから約0.4mの間は、バラストとアスファルト舗装の宿舎建設時の整地がある。さらに下部は約0.5～0.8mの工場解体時の整地土がみられる。この段階一部に大きな穴を掘りゴミを埋め込んだ擾乱がある。この整地土の下部には水田層が幾層もみられ、周辺調査の所見から江戸時代以降のものと考えられている。この水田層の下部に包含層(水田耕作に伴う攪拌層?)が堆積しており、これより下位の標高約3.8m前後が遺構検出面となる。周辺調査地の検出面の標高もほぼ同じであるが、本来はもう少し高い位置から遺構は掘り込まれていると推定され、先の水田耕作により削平を受けているものと考えられる。

検出された遺構には、2条の溝状遺構と浅い溜まり状遺構(整地)、ピットなどがある。2条の溝状遺構(町56SD005・012)は、調査区の東端(推定ライン付近)で検出され、新旧関係をもち町56SD012→町56SD005の順に構築されている。町56SD005は、幅約2.0m、深さ約0.6mの断面形状逆台形を呈す。土層観察から数回の掘り返しが確認でき、各層の下部には小さい黄灰色シルト質土ブロック(地山ブロック)の堆積がみられる。出土遺物には京都系土師器皿などがあり、16世紀後葉頃に構築されたものと考えられる。町56SD012は、町56SD005のさらに東側(拡張時)で検出されている。幅約1.2m、深さ約0.6mで町56SD005と同じく断面形状逆台形を呈す。土層観察から数回の掘り返しが確認でき、町56SD005同様に各層の下部には小さい黄灰色シルト質土ブロック(地山ブロック)の堆積がみられる。出土遺物は少量であるが、土師質鍋や須恵質こね鉢が出土しており、また、1点ではあるが平瓦も出土している。町56SD012については、現状でこれら出土遺物の所属年代から15世紀代のものと考えられる。どちらの遺構も狭い調査区内での確認であり、溝状遺構と判断するのは確実でないが、断面形状などから現時点では溝状遺構と位置付けておく。また、町56SD005・012どちらからも小片ではあるが焼けたスサ入り粘土塊(壁土)の出土がみられ、さらに両遺構を覆う埋土(整地層)からは、拳大の焼けたスサ入り粘土塊(壁土)も出土している。

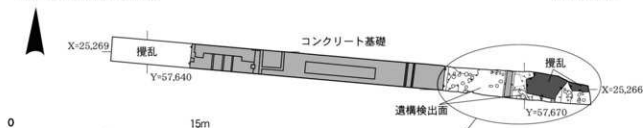
その他の遺構としては、溝状遺構の両側に展開する浅い溜まり状遺構やピットであるが、概して遺構密度は希薄であり、浅い溜まり状遺構については整地土の可能性が考えられる。溝状遺構の東側については、若干地山ブロックを多く含む土層(整地土)が確認されているが、西側との違いについては、現時点で言及するのは困難である。また、東側の整地土からは、2mm弱のガラス製ねじり小玉が1点出土している。

まとめ

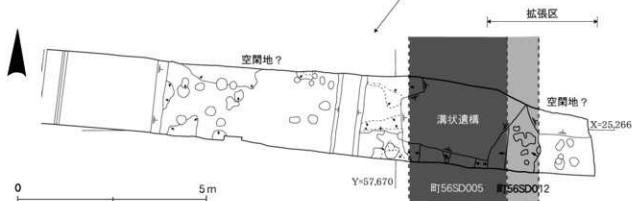
今回の調査では、館推定西側外郭線から東に約1.5～5mの間で新旧関係をもつ2条の溝状遺構が検出され、その両側は空閑地ともいえる遺構密度の希薄な空間が確認された。また、各溝状遺構の埋土内からは壁土が少量ではあるが出土しており、周辺に土壁をもつ築地塀のような施設の存在が想像される。さらに溝状遺構下部に見られる細かい地山ブロック土の堆積については、築地塀などの基礎(版築土)の流れ込みの可能性が指摘できる。こ

うした状況は、館北側外郭線の確定に至った大友氏館跡第7次調査の築地跡に類似しており、調査地の東側にそうした施設の存在する可能性が想定される。また、館東側外郭線の確定に至った県教委の調査(町18次調査等)所見より、南北街路跡から館側に約10mの空地をもつことが指摘されており、溝状遺構の西側の空地についても同様の状況が推測される。以上のことから今回検出された溝状遺構については、大友氏館跡西側を区画する施設の可能性が考えられる。

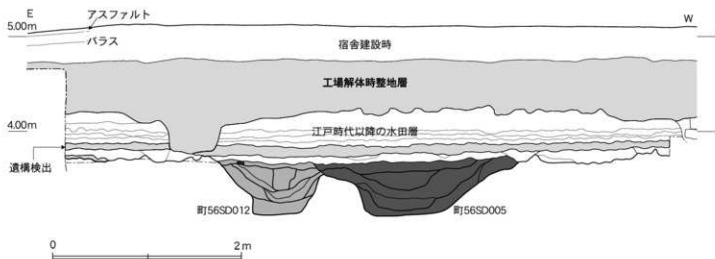
(中西 武尚)



第19図 町56次調査区遺構配置図 (1/300)



第20図 町56次調査区遺構配置図部分 (1/100)



第21図 町56次調査区南壁土層断面図 (1/40)

(9) 中世大友府内町跡 第58次調査

調査は、中世大友城下町跡内において集合住宅建設の申請があり、事前の埋蔵文化財確認調査(試掘調査)を実施した。その結果、現地表面(標高約5.5m)から約0.8m下(標高約4.7m)において遺構・遺物が確認された。今回申請の建物については、地下の埋蔵文化財に影響を与えることはないと判断されたが、中世府内町の状況を把握する目的で確認調査を実施した。さらに、建物基礎部分の掘削時に立会いを実施したところ掘削が遺構検出面まで至っており、関係業者と協議の上、工事に支障をきたさない範囲で遺構検出のみの緊急の確認調査を実施した。

調査地点は「戦国時代の府内復原想定図」により推定されている東側2本の南北道路(通称「第一南北街路」と「第二南北街路」)に挟まれた地区のほぼ中央、推定御所小路町の北側に位置し、周辺調査では、平成15年度に調査を実施した町38次調査区のすぐ東側にあたる。

調査地は宅地として使用されており、現地表からおよそ0.4mの深さで宅地造成土[第1層]がみられ、さらに下層には、暗青灰色粘質土の耕作土[第2層]が約0.1～0.3mの厚さで確認された。その下位には、暗茶褐色砂質土のしまりのある堆積層[第4層]が確認され、この層は標高約4.7～4.8mで約0.1mの厚みをもって、北側調査区全体に確認されている。この面より切り込む遺構は現状で確認されていないが、埋土の状況から整地層の可能性も考えられた。立会い調査の結果、この層[町58SX045]は建物建設予定地の中央付近まで広がっていることが確認でき、この層に切り込む遺構群も検出された。これにより町58SX045は整地層と考えられる。北側調査区ではこの層を除去すると標高約4.6～4.7mで各遺構群[第5～22層]が検出された。この遺構群が形成される明茶色砂質土の安定面[第23層]には、遺物や炭化物が含まれており整地層と考えられる。この整地層より下位の安定面がいわゆる地山となる。立会い調査の結果では、先の町58SX045より南側ですでに第23層の安定面が標高約4.8～4.9mで面的に確認できた。このことから自然地形は、北側にやや低くなっていくものと考えられる。

検出された遺構は、北側調査区内において廃棄土坑[町58SX001]、方形竪穴遺構[町58SX010]、溝状遺構[町58SX011]、大形土坑[町58SX015]、溝跡[町58SD020]などがある。立会い時のものについては、掘り下げを全く行っておらず、遺構の性格・時期ともに不明なものばかりであるが、以下のような遺構が検出された。円形の大形遺構[町58SX025]、同一埋土をもつ柱穴群[町58SX030・035]、畝状遺構[町58SX040]、整地遺構[町58SX045]、溝状遺構[町58SD050]、積土状遺構[町58SX055]。

町58SX001は、長軸約1.8m・短軸約0.9mを測る楕円形プランを呈す。検出面からの深さ約0.15mで、埋土内には多量の焼け石や瓦片、鉄滓などが含まれている。出土状況から廃棄されたものと考えられる。町58SD011は、調査区東側で斜めに延びる溝状遺構である。検出長約3.5m、幅約0.5m、深さ約0.3mを測り、後述する方形竪穴遺構[町58SX010]の辺りで終息する。埋土はブロック土を多く含む暗褐色土の単層で、一度に埋め戻されたものと考えられる。町58SX010は方形の竪穴状の遺構で、上面は調査区西側一帯に確認される整地状の堆積土である。一段掘下げた段階で、長軸約3.0mの方形のプランを確認し、それよりさらに下部に一边が約2.0mの方形の掘り込みが確認できる。埋土内には、炭化物や焼土粒子が多量に含まれており、鉄滓なども一定量出土している。また、調査区西端では凹み状の小ピットが2基検出され、埋土には多量の炭化物を含んでいる。これらの状況から当遺構については、鍛冶に関する遺構の可能性が指摘でき、町58SD011の溝状遺構についても関連する遺構の可能性が高い。また、町58SX001については、町58SX010や町58SD011の機能停止後に最終的に廃棄された土坑と考えられる。これらの遺構からは、京都系土師器をはじめ、ロクロ目土師器などの土師器類が多く出土し、その他では備前焼埴鉢・甕(中世6期:乗岡編年)なども出土しており、これら遺物の帰属年代から16世紀後葉頃の所産時期が考えられる。

これより以前の遺構では、町58SX010と新旧関係をもつ町58SD020がある。町58SD020は、幅約1.5～1.8mを測り、深さは現状で約1.6mを測る溝跡で、断面形状は鋭角なV字状を呈す。土層観察から数度の掘り返しが認められ、溝跡の西側では、砂質土とシルト質土による積土状の堆積土[第20～22層]を確認している。埋土内からは、焼け

たスサ入り粘土塊(壁土)などの大小の破片も見つかっており、当遺構は築地塀などの遮蔽施設に伴う溝跡の可能性が考えられる。また、この溝跡は機能停止後一気に埋め戻され、最終埋没土[第12層]は整地に伴うものと考えられる。出土遺物には、クロコ目土師器や青磁碗、青花碗(C群：小野編年、備前焼播鉢・甕(中世4～5期：乗岡編年)などが出土しており、これら遺物の所属年代から15世紀後葉～16世紀の所産時期が考えられる。

町58SX025は、直径約3.6mを測る円形の大形遺構である。遺構の形状や埋土の状況から井戸跡の可能性が指摘できる。町58SX030は、暗茶色砂質土の埋土をもつ柱穴群で、それぞれ直線で結ぶことが可能であり、一連のなんらかの施設である可能性を指摘しておく。先の町58SX025とは、位置関係から並存していたと想定される。町58SX035も淡茶色軟質土の同一埋土をもつ柱穴群で、それぞれ直線で結ぶことが可能であり、一連の施設である可能性を同じく指摘しておく。町58SX025と新旧関係をもつことから、これに先行した遺構と考えられる。町58SX040は畝状遺構であり、当該地が畑地として利用されていたことがわかる。町58SX030・035の柱穴群に切り込まれていることから、これらに先行する時期が考えられる。町58SX045は先述した整地層であり、町58SX040の畝状遺構に切り込まれている。北側調査区内で検出した遺構群は、この層にバックされていることから16世紀後葉以後の所産時期が考えられる。しかしながら、立会い時に検出している畝状遺構の延長が北側調査・試掘調査段階で検出し切れず、この層に掘り込む遺構があった可能性を否定できない。町58SD050・町58SX055は、町58SD020と同一の溝跡と考えられる。町58SX055については、第20～22層の積土状の堆積プランになると考えられ、幅は約1.4mを測る。周囲には同一時期と考えられる遺構は展開しておらず詳細は不明であるが、築地塀等の遮蔽施設の東側のみに防御性の強い溝が掘削されたと考えられ、これらの西側に主たる施設があったものと推定される。

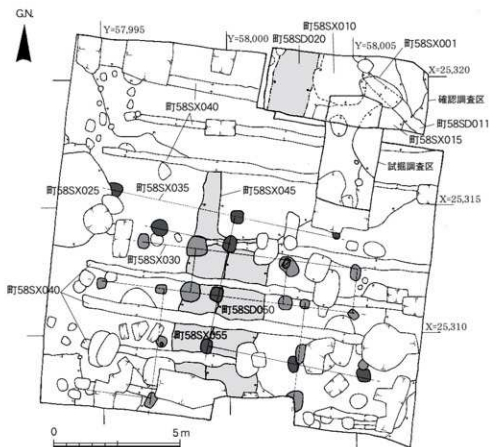
今回の調査では、時期の特定できるものとして大きく2時期の遺構群を確認することができた。立会い調査に関しては、時期の特定に至っていないが、状況から以下のような変遷が想定される。15世紀後葉段階の築地塀のような遮蔽施設を伴うと考えられる溝跡の確認は、当該地の土地利用状況やその変遷を考える上で重要な発見であり、その展開状況や規模など今後の周辺調査に期待するところが大きい。加えて、出土遺物の大半が、町38次調査と同様に土師器群であることは注目され、大友氏館内でみられるような武家儀礼に携わる人々の存在を想起させ、この区画施設の西側に町屋域とは別の空間(武家地)が考えられる。次に、16世紀後葉段階では、鍛冶関連と考えられる遺構が確認されているが、その後は畑地として利用されている状況がうかがえ、さらに宅地として利用されたと考えられる。後半の変遷に関しては、検出のみの調査のため時期が特定できないが、同一検出レベルですでに15世紀後葉に比定した町58SD020・050、町58SX055が検出されていることや遺構の状況から鍛冶関連遺構に近い時期が想定される。今後、周辺の調査時には十分に注意し検証する必要がある。(中西 武尚)



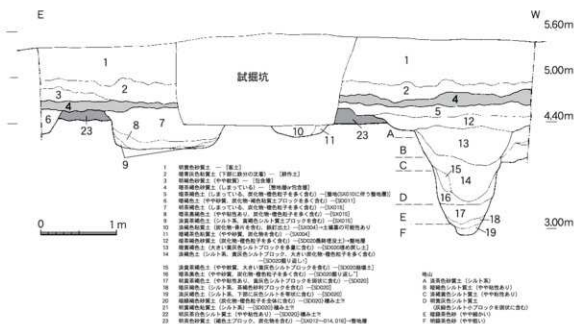
立会い時遺構検出状況(東より)



町58SD020完掘状況(北より)



第22図 町58次調査区遺構配置図 (1/150)



第23図 町58次調査区南壁土層断面図 (1/50)

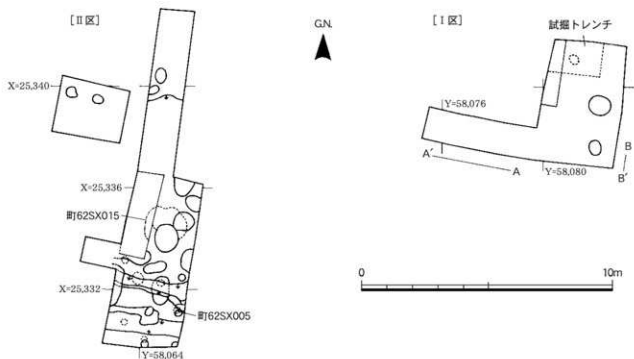
(10) 中世大友府内町跡 第62次調査

当該地は、「府内復原想定図」により推定されている南北道路(以下「第一南北街路」)に面する上市町に位置する。今回の調査は、事前の試掘確認調査の段階で確認された第一南北街路の西端部の確認と、道路に接する町屋の状況の解明を目的とした。調査対象地東側にⅠ区、西側にⅡ区として調査区を設定した(第24図)。

Ⅰ区 調査区南側に設定したサブトレンチ南壁面において、地山に切り込む溝状遺構〔町62SD030・035〕と、これを掘り込んで、粘質土と砂や砂利を互層に積み、嵩上げを行った道路状遺構〔町62SF020〕が確認された(第25図)。また一旦路面が形成された後も、積土による路面の形成が行われている。サブトレンチ西側端部では側溝状の掘り込みも確認されたが、調査区の制限により、面的な伸展は確認できていない。地山直上の砂層からは15世紀代に比定される土師器(いわゆる「ハコ型土師器」)小坏片が出土している。道路を構築する積土からは16世紀前半に比定される在地系土師器皿(いわゆる「ロクロ目土師器」)、その上層部では16世紀後半に比定される京都系土師器皿の小片が確認された。

Ⅱ区 近世の包含層下層より、道路状遺構に類似する砂質土の硬化面を伴う積土状遺構が調査区全面で確認された。性格不明のビットと土坑数基が積土上面から掘り込まれる。また硬化面直上で、16世紀末期に比定される京都系土師器皿が合せ口にされた状態で出土した。上下2個体ともに完形品であり、恣意的な埋置遺構〔町62SX005〕であると考えられる。近世の削平の影響を受けているため、積土地業の際に埋置されたものであるか、積土の最終構築面から掘り込んで埋置されたものであるかは不明である。

積土堆積層下面には炭溜まりの土坑〔町62SX015〕を伴う文化面が展開する。この土坑内に龍泉窯系青磁片が含まれており、この遺物の所産時期から少なくとも積土による地業は15世紀後半以降に行われたと考えられる。また南北軸、東西軸でそれぞれサブトレンチを設定したところ、東西方向には積土による堆積層が調査区外へと伸展していくのに対し、南北方向ではこれが途絶え、これに接するように数基のビットを有する文化面が確認され



第24図 町62次調査区遺構配置図 (1/150)

た。この文化面直上からは中国産染付皿(C群)が出土している。積土遺構とこの文化面との新旧関係は不明であるが積土の分布状況から、積土地業の北端部になるものと考えられる。現状では当調査区で確認された積土遺構は第一南北街路とは別の、東西方向に伸びる道路状遺構である可能性が想定される(第27図)。

まとめ 今回の調査において、この第一南北街路に相当する道路状遺構が、町17次調査地点で確認された道路状遺構同様に、道路形成以前の大溝と、小溝群が存在する段階①、掘り込み地業を伴う道路が存在する段階②、積土による路面の形成と、道路の西側への移動もしくは拡幅が行われる段階③を経て構築されたものであると確認された。②段階と③段階の詳細な時期差については、現状では言及できない。なお、②段階の道路遺構の西端は調査区内で収まるものと考えられるが、東端は調査区外にあたるため、実際の道路幅は不明である。調査区内で確認できるだけで、②段階における路面は、少なくとも幅7mを測り、過去の調査成果と併せて考えるとさらに規模が大きくなる可能性がある。

また、Ⅱ区において確認された積土遺構については、「府内古図」には道路の記載がない地点での確認ということになる。この積土遺構が東西道路の一部であるか否かは、町割の構造を解明する上で重要であり、今後の検討課題であるといえよう。

(仲矢 咲紀)

<参考文献>

小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究会』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田 勉 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究会』No.2 日本貿易陶磁研究会



Ⅰ区サブトレンチ土層観察状況(北西より)



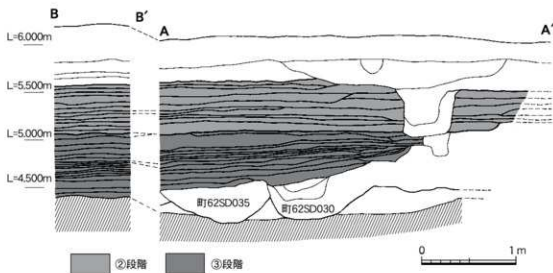
Ⅰ区サブトレンチ東壁土層観察状況(西より)



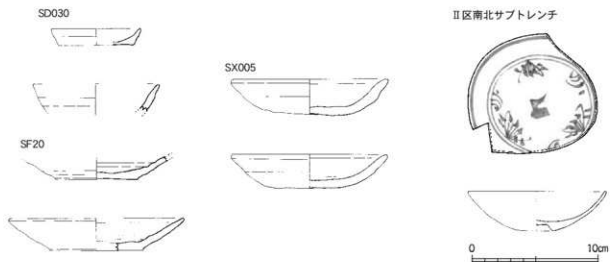
町62SX005遺物出土状況(西より)



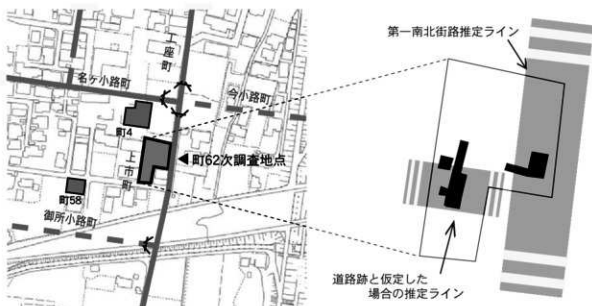
Ⅱ区南北サブトレンチ西壁土層観察状況(南東より)



第25図 I区サブトレンチ東壁・南壁土層断面図 (1/40)



第26図 町62次調査出土遺物 (1/3)



第27図 府内復原想定図における調査地点及び街路推定ライン

(11) 中世大友府内町跡 第64次調査

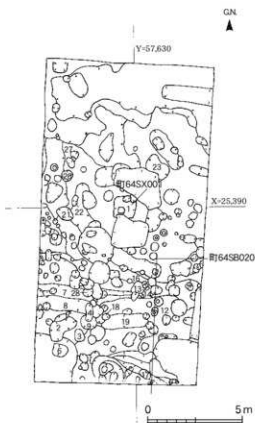
第64次調査は、平成15年に試掘調査を実施した地点である。今回具体的に福祉施設建設の計画が持ち上がり、以前の試掘調査のデータを基に建築業者である利根建設と協議を行った。基礎についてはコンクリートの平基礎を用いて、その上に鉄筋の柱を立てるように設計を変更することを依頼し、掘削は遺構検出面まで及ぼさないよう指示した。その結果、建築業者の協力が得られ、遺跡は保存されることで合意に達した。しかし、遺跡検出面を算定するレベルの認識の違いで、掘削が遺構検出面まで至っていることから、緊急の確認調査を行った。調査は、時間的制約と遺跡保存の観点から検出のみで留めている。

町64次調査区は「戦国時代の府内復興想定図」によると推定中町と推定御西町の中間点に位置する。遺構検出面は標高約3.8mになる。遺構は、調査区の北側と南側で異なる状況であった。調査区の南側では、複数のピット及び土坑(?)、大型土坑及び溝状遺構が展開している。ピットには根石を有するものも認められる。ピット群のうち、幾つかは建物等を構成するものになる。調査区の東側で確認される掘立柱建物跡[町64SB020]は、南北3間×東西1間+αの規模を有し、主軸方位はN4°-Eである。この建物について注目される所見として、町44次調査で確認されている建物跡[町44SB100]と西側柱穴列を揃えて建てられていることが挙げられる。推定中町は両側町であると考えられており、第四南北街路に面する東西棟が展開することが想定されている。町64SB020は、これら東西棟に直交する可能性が高く、よって、中町の裏側に展開する御西町を構成する建物である可能性も推測され、町64SB020の東側に面することが推定される第三南北街路を意識したものと考えられる。ちなみに、第四南北街路から町64SB020まで約20mの距離しかなく、上記の仮説が正しいとすれば第三南北街路西側の長方形区画は高密度で建物が広がっていたことが予測される。

調査区の北側は、遺構密度は南側程高くない。

町64SX001は平面方形を呈す掘り込みプランで、内部に五輪塔地輪が埋没していた。この方形プランを取り囲むように幅員約1m、長さ約7mを測る溝状遺構が円形に廻る。墓域を区画する施設の可能性が考えられる。掘り下げを行っていないため詳細については不明であるが、遺構間の新旧関係から判断すると、16世紀後半より以前になることは確実である。

今回の調査では、御西町及び中町(東側)の状況が断片的ではあるが推定できる重要な所見が得られた。ただ、詳細な遺構確認調査が実施できなかったのは残念である。今後、大友氏館跡周辺の様相(特に西側)を解明するには、必ず事前の確認調査を行うことが必要であろう。(佐藤 道文)



第28図 町64次調査区遺構配置図 (1/200)



調査区全景(南東より)



第29図 調査地点位置図 [複原想定図部分]



第31図 町44次・64次遺構配置図 (1/600)



町64SX001遠景 (北より)



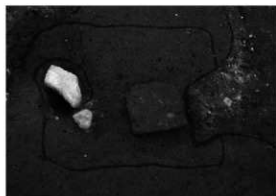
第30図 町64SX001平面図 (1/120)



調査区全景 (北東より)



調査区南側ピット群 (東より)



町64SX001詳細

(12) 中世大友府内町跡第65次調査

今回の調査は、大友氏館跡の西側に存在が想定されている第三南北街路を確認し、大友氏館跡の西側エリアを確定させることを第一目的としている。調査区は日蓮正宗本土寺の敷地内である。調査の目的を説明したところ、理解をしていただき、協力を得ることができたことから平成17年11月24日から12月20日にかけて実施した。調査区は、敷地内を駐車場として利用しているため、幅約1m(南北)、長さ9m(東西)の細長いトレンチになっている。

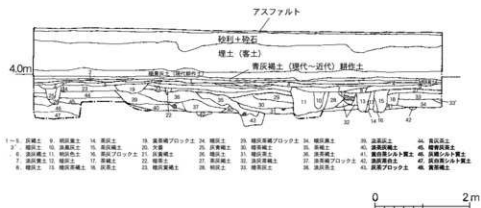


第32図 調査地点位置図 (復原想定図部分)

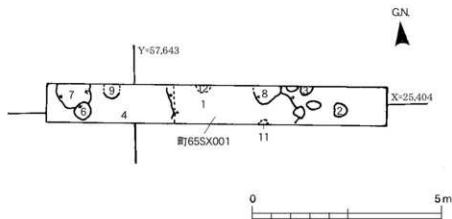
町65次調査区は「戦国時代の府内復原想定図」によると、御西町もしくは御北町に該当する。遺構検出面は標高約3.8～3.9mで、周辺の調査地とほぼ同一レベルである。検出した遺構には、柱穴跡・土坑・大型掘り込み遺構などがある。柱穴跡・土坑は、厚手タイプの京都系土師器を含む整地層(土層図21・23層)を掘り込んでいることから16世紀後半以降になると思われる。調査区の西側では小規模ながら掌太の礎が石列状に並んでいた。柱穴跡・土坑の埋土には焼土塊を多く含むものが認められていることには注意したい。大型掘り込み遺構[町65SX001]は、上記整地層の下位で検出され、調査区外に延伸することから全容は不明である。現状では東西約6.8m+α、深さ約0.4mを測り、底面はほぼフラットで、西壁は緩やかに立ち上がる。大きく3回の掘り返しが行われており、最も新しい段階のものはⅢ期に比定される京都系土師器皿が出土していることから16世紀後半以降には埋設していることが分かる。古い段階に位置付けられるものは、京都系土師器を含まず、在地系のクロロ目を残す土師質土器破片が多い。埋土の状況を見ると、ブロック土が認められることから人為的に埋められた可能性が高い。また、堆積は全て西側からの斜堆積である。現状では、町44SB100・町65SB020の東側に位置する区画施設になる可能性が想定される。柱穴跡の分布であるが、調査区の東側に集中し、ほぼ同一地点で建替えが行われている。よって、この場所に何らかの建造物が構築されていることは確かである。時期は、町65SX001より新しいことから16世紀後半～末以降に比定される。

今回の調査では、確実に第三南北街路といえる状況は発見できなかった。しかし、この地に戦国期に比定される大型の掘り込み遺構が形成され、掘り返しが行われていることから一定期間何らかの役割を果たしていたことは間違いない。その後、町65SX001は埋め立て・整地された上、建物が建てられ調査地は宅地へと変容すると考えられる。

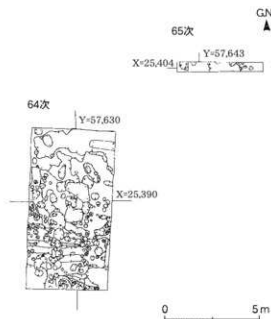
(佐藤 道文)



第33図 町65次調査区北壁土層断面図 (1/80)



第34図 町65次調査区遺構配置図 (1/100)



第35図 町64・65次調査区配置図 (1/400)



調査区全景（東より）

(13) 中世大友府内町跡 第66次調査

調査は、昨年度確認調査を実施した集合住宅建設に関わる町44・44-2次調査において、当該時に畑として使用しているため調査できなかった部分について、今年度、一連の工事の工程で駐車場整備にとりかかるということであった。調査地は、町56次調査で確認された南北に延びると考えられる溝状遺構[町56SD005]の延長部分にあたることから調査が必要と考えられた。そこで昨年度同様に、地権者と開発業者の深いご理解とご協力のもと、工事に支障のない範囲での調査の許可をいただいた。調査は、大友氏館跡の西側外郭線の確定を目的とし、溝状遺構[町56SD005]の延長部分と周辺の遺構の展開状況を把握するために実施している。

調査の結果、町56SD005の延長と考えられる溝状遺構や町56次調査と同様に溝状遺構の西側に空閑地が確認されている。

また、現在推定されている西側外郭線上に位置する排水溝のあたりに、対となる溝状遺構が存在する可能性が高くなり、西側外郭線の確認調査の一環として、さらに東側についてトレンチ調査を実施している。詳細については現在調査中であり、次年度報告予定である。

(中西 武尚)

横尾遺跡



2006



横尾遺跡第100次調査区東壁土層



横尾遺跡第100次調査区SX-20（南から）

表紙写真 横尾遺跡第100次調査区全景（東から）

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

横尾遺跡の調査の多くは、大分市が平成3年度から開始した大分市横尾土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として行われてきた。平成12・13年度に横尾貝塚の西側隣接地において実施された横尾遺跡第82次調査によって、縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、アカホヤ火山灰層の下位から加工木を「コ」の字状に配置した「水場の遺構」やその内部からカゴに収納された状態で姫島産黒曜石が発見された。そのことを受け、平成13年9月より国庫補助事業による範囲確認調査が実施されることになった。平成14年度からは横尾貝塚周辺の約20haを対象の確認調査が計画され、同年に設置された大分市横尾遺跡調査指導者会の指導に基づき、調査が進められることとなった。

平成17年度は、縄文時代の居住域の確認と各時期にわたる遺構変遷の把握ならびに古環境復元のためのデータ採取を主目的として、横尾貝塚周辺部の低位段丘面と第82次調査区の北側に開口する推定古地形模式図(以下模式図と略す：第24図)の「谷1」を中心に確認調査を実施した。以下に、その概要についてまとめる。

(2) 調査組織

大分市横尾遺跡調査指導者会

会 長	渡辺 誠 (名古屋大学名誉教授)
副 会 長	岡村 道雄 (奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
委 員	浅川 滋男 (鳥取環境大学環境デザイン学科教授)
	金原 正明 (奈良教育大学総合教育課程文化財コース古文化財学科助教授)
	竹村 恵二 (京都大学大学院理学研究科付属地球熱学研究施設教授)
	中村 俊夫 (名古屋大学年代測定総合研究センター教授)
	町田 洋 (東京都立大学名誉教授)
	松井 章 (奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室室長)
	山田 昌久 (首都大学東京都市教養学部助教授)

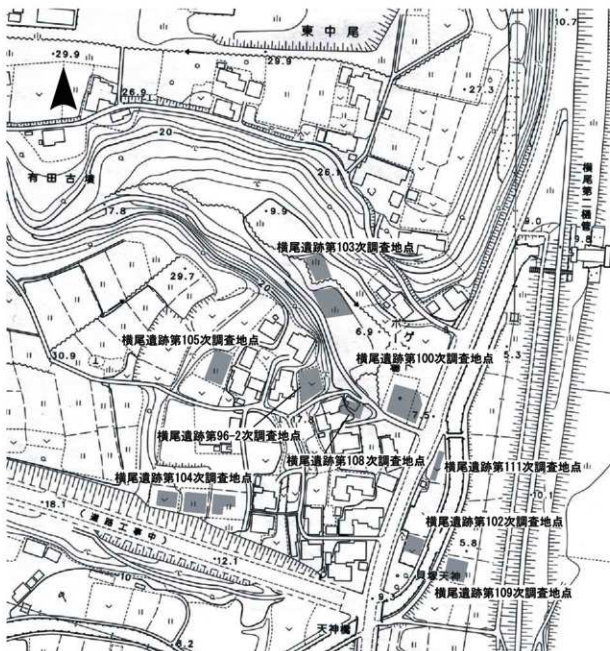
調査指導	岡田 康弘 (文化庁文化財部記念物課文化財調査官)
	渋谷 忠章 (大分県教育庁埋蔵文化財センター所長)
	高橋 徹 (大分県教育庁文化課課長補佐)
	後藤 一重 (大分県教育庁文化課主幹)

調査主体	大分市教育委員会 教育長 秦 政博
------	-------------------

調査担当	塩地 潤一 古川 匠 永松 正大 山本 哲也 衛藤 亮介
	梅田 昭宏 服部 真和 姫野 久恵 松田幸之助 宮田 剛

発掘作業従事者

青井 幸子	安部 國男	安部 孝昭	阿部 暢夫	安倍 美紀	尼子 信也	雨川 寛	飯田 美子
伊賀上志保	伊藤美津子	上田 和人	植松 千歳	内梨 洋二	梅田美代子	江崎 義春	衛藤 勇
江藤 和子	大友萬知子	大西 弘子	大西 正彦	荻 松幸	尾崎 周子	小代 国榮	小代 正二
小野 澄子	加藤 智子	加藤美枝子	門田駒二郎	門脇三重子	上村 隆康	清武 元子	吉良 年光
小迫 剛	後藤 裕	小溝健一郎	在家 澄子	坂本 和子	佐々木盛子	佐藤 道子	佐藤 良江
佐藤 美子	清水タカ子	城本 和子	神宮司昭夫	杉尾日出子	杉谷 玲子	高田 靖子	竹中 久美
田原 良夫	近乗 弘子	竺 京子	土田ヨシ子	鶴岡 曉美	徳丸 啓子	富永 妙子	奈須 由和



第1図 横尾遺跡調査区位置図 (S=1/2500)

藤江 久由 本田 勝敏 本間 英子 真部佳世子 丸尾 具彦 御手洗幸子 三俣 武士 向 真里子
村谷 初代 森 信一 山並八十司 渡部 俊治

整理作業従事者

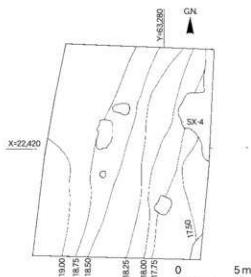
串 京子 佐藤 良子 竹中江里子 平田美智子 本田かおり 本田理恵子 牧 かすい 村上 友美
吉村 香織

第2章 平成16・17年度の調査概要

(1) 横尾道路第94次調査

第94次調査区は、平成15年度に確認調査を行った第91次調査区が北に隣接し、東には第87・93次調査区が位置する地点に設定した。第91次調査区では戦国期の掘立柱建物跡が検出され、第87・93次調査区では縄文時代前期前葉の小規模貝塚、竊B式深鉢の埋納遺構のほか、後期前葉の配石遺構、地床跡、土坑墓、小規模な竪穴状遺構などの数多くの遺構が検出された。第87次調査区とその北側に位置する第82次調査区は、中世段階に埋没した北側に開口する小規模な模式図「谷2」の底に立地することが判明しており、第94次調査区はこの谷から西側に展開する「推定舌状台地」の平坦面端部に位置する。第93次調査区はこの谷の南側の谷頭から谷底に至る地点に位置する。第82次・第87次調査区では中世の堆積層より後期前葉を中心とする非常に大量の縄文土器が出土しており、中世段階に削平されたものと推定される。そして、遺物の分布状況からこれらの縄文土器の本来の帰属地として、第93次調査地点を含む西側の斜面地が有力な候補となることが昨年度の調査より明らかになった。隣接する第87次調査区で当該期の定住生活に伴う遺構群が検出されたことから、縄文時代後期の集落がこの地点に存在した蓋然性は高いと想定された。

縄文時代の遺構の存在を確認することを目的として調査を進めたが、表土直下で堅固な段丘礫層が姿を現し、ほとんど遺構が確認できなかった。9世紀後半～10世紀代に比定できる堆積層(SX-4)が段丘礫層直上で一部確認されたが、ごくわずかな面積に限られ、その下位からも縄文時代の遺構は検出されなかった。



第2図 第94次調査区遺構略測図 (S=1/300)

(2) 横尾道路第95次調査

第95次調査区は大分市大字横尾字江又に所在する。平成16年度に確認調査を行った第93次調査区が西に隣接し、さらに東に第87次調査区、北東に第82次調査区が存在する。第93次調査区では縄文時代後期前葉に比定される小規模な竪穴状遺構、土坑墓を検出した。第82次調査区では縄文時代早期後葉の姫島産黒曜石製大形石核や、カゴり姫島産黒曜石と部材から構成される早期末の「水場の遺構」、後期前葉のドングリ貯蔵穴などが発見されている。第87次調査区では前期前葉の小規模貝塚、竊B式深鉢の埋納遺構、後期前葉頃の配石遺構、地床が検出されている。東側に立地する横尾貝塚と併せて、周囲には縄文時代の遺構が数多く存在する。

第95次調査は第93次調査の成果を受け、縄文時代の遺構の存在の検証を目的とし、第93次調査区西隣の斜面を上がりきった段丘面上端の平坦面に設定した。

表土の直下で段丘礫層が露出し、段丘礫層に掘り込まれた少数の土坑・柱穴を検出した。第93次調査区西端でも同様の検出状況で、土坑が検出されており、この地点の堆積層が後世に完全に削平された事を示す。本調査区の出土遺物量は非常に少なく、また、縄文時代の遺物・遺構も確認できなかった。



第3図 第94次調査区遺構略測図 (S=1/300)

(3) 横尾遺跡第96-2次調査

第96-2次調査区は、模式図の「谷2」と「谷1」との合流点に形成された「推定舌状台地」上に位置する。谷の埋没過程を含めた旧地形の復元と、縄文時代の遺構確認を目的とする。平成16年度からの継続調査であり、本年度の調査次数を第96-2次とする。

表土の下には黒色の堆積層SX-06が堆積し、肥前系陶器碗、クロコ土師器などを包含し、16世紀末～17世紀初頭段階に比定される。SX-06直下では調査区北西隅でクロコ土師器皿を二枚重ねて埋納した土坑SK-10が検出され、16世紀後半の遺構と考えられる。今後この時期の遺構が周辺で発見される可能性が高い。

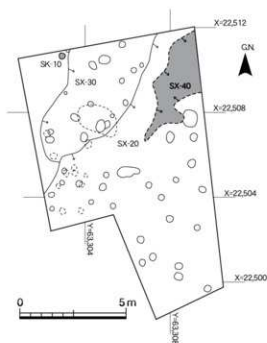
この下位には土師器杯・瓦質土鍋・瓦質播鉢・白磁碗・龍泉窯系青磁碗などを包含する14世紀中～後半頃の堆積層SX-15・SX-20が調査区のほぼ全面を覆い、このうちSX-20には遺構が形成され、調査区のほぼ全面に小規模な土坑が分布する。土坑の配置には規則性が認められず、原位置を保つ遺物も含まれないため、その性格は不明である。

SX-20の下位からは段丘礫層が姿を現し、調査区全面に見られ、西から東へ傾斜する。段丘礫層を検出面として土坑数基と不明遺構SX-40が検出された。これらは古代に属し、SX-40は最大幅約3mに達する溝状の遺構で、遺構底が側溝状に窪み、その箇所には礫が集中している。調査区の立地より、台地上から斜面を伝って谷へ降りていく道路である可能性が想定される。

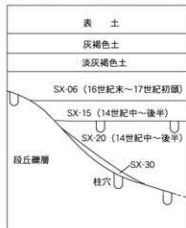
本調査区で確認された堆積層は、第82・87・93次調査で検出された中世以降の堆積層とよく似ている。SX-06は第93次調査区でも同一と推定される層が確認されており、またSX-15・20は第82、87次調査区で検出された、縄文時代の遺物を大量に含む分厚い堆積層と類似した特長を有する。ただし、いずれの堆積層も古代の遺物を多量に包含しているが、縄文時代の遺物がほとんどみられない点では近隣の調査区とは様相が大きく異なる。

SX-20の下位で出現する礫層は東に向かうほど傾斜が大きくなり、深く落ちる。中世段階の堆積層であるSX-15、SX-20は、この傾斜を緩和するかのように、堆積している。この礫層の急激な傾斜は、中世より以前の旧地形を表している可能性がある。礫層は段丘面と段丘斜面との境となる屈曲線を明瞭に示すが、この屈曲線は北東に向かって突出し、斜面は南東方向に向かって延びる。現地形と、従来の確認調査の結果より想定される古地形復元と符合する。

今回の調査では、主目的である縄文時代の集落域を示す遺構は確認できなかったが、中世の遺物包含層が比較的良好な状態で残っていることは、表土直下で直ぐに段丘礫層が現れることの多い段丘面上では珍しく、本調査区とその周辺は後代の削平をそれほど被っていないようである。また、段丘礫層で発見されたSX-40が道路状遺構であれば、段丘面から谷に下ることを目的としたものであろう。段丘面上に居住域の展開が想定される縄文時代においても、後期前葉頃にドングリ貯蔵穴を形成する等、積極的に活用していた谷の中へ降りるために同様の遺構が形成された可能性があり、今後の発見が期待される。



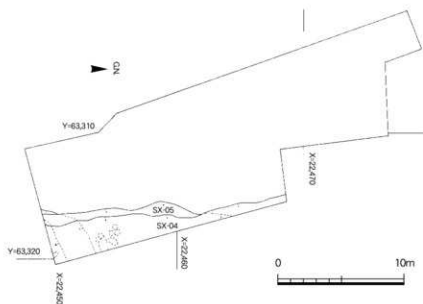
第4図 第96-2次調査区遺構略測図 (S=1/200)



第5図 第96-2次調査区土層模式図

(4) 横尾道路第97次調査

第97次調査区は、第82・87次調査区が位置する模式図「谷2」から、西側の台地上平坦面に向かう斜面にあり、第93次調査区の北隣に位置する。第82・87次調査では、中世の堆積層から大量の縄文土器片が出土しており、西側からの遺物の移動が想定されている。当調査区はその帰属地の候補の一つであるとともに、第82次調査区の縄文時代早



第6図 第97次調査区遺構略図 (S=1/300)

期末頃の「水場の遺構」に関連する遺構の存在も想定されたため、調査を実施した。

調査区西側の斜面では表土直下で礫層が検出され、遺構は確認されなかった。調査区東側の平坦部では中世前期から戦国期に比定される堆積層SX-04が確認された。また、12世紀後半～13世紀前半頃に想定されるSX-05で柱穴・土坑を数基検出した。今年度の調査は調査区の制約上、中世前期の遺構面で終了し、縄文時代の遺構は確認されていない。しかし、これらの堆積土層は模式図の「谷2」の埋積土であり、既往の調査成果より、下に縄文時代の遺構が展開する可能性がある。

(5) 横尾道路第100次調査

第100次調査区は第82次調査区の北に里道を隔てて隣接する。第82次調査区では早期後半頃の姫島産黒曜石製大形石核、早期末頃の「水場の遺構」、後期前半頃のドングリ貯蔵穴群が検出されている。また、本調査区は模式図「谷2」と東に開口する大規模な「谷1」との合流点に位置する。

本調査区では、第82次調査区で検出された遺構群と対応するように各時期の遺構が検出される可能性があることから、縄文人の谷地形の利用状況をより広く検討することを目的とした。また、これまで「谷2」とその周辺で主として調査してきたが、縄文時代の集落域がこの「谷1」に及ぶか否かの確認も、今回調査の目的である。

中世～近世

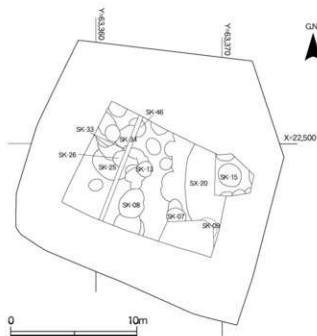
表土直下は約2mに及ぶ厚い攪乱層が堆積するが、その下位は本来の谷地形に伴う堆積土層が見られる。SX-01は谷堆積土と考えられる粘質土層である。昭和年間にはこの地点は水田であり、おそらくこの層が対応すると考えられる。寛永通宝が1点出土したことから、その帰属年代を17世紀代を上限に定められる。

SX-02は礫を多量に含む砂質の堆積層で、調査区西端では礫が稀薄になる。輸入磁器、土師器、瓦質播鉢の破片などが出土したことから、13世紀後半～14世紀前半に比定される。SX-02は谷堆積層と考えられるほかの堆積層とはやや異質な、黒色砂質の堆積層である。類似する層が隣接する第82次調査区で確認されており、帰属年代もSX-02とほぼ同時期であることから、同一層かと考えられる。ただし、第82次調査区のこの時期の堆積層には莫大な量の縄文土器が包含されていたのに対し、本調査区のSX-02からは縄文土器が出土するものの量は少ない。

SX-03はグライ化した粘質土層である。縄文土器が多量に含まれるが、同安窯系青磁片などの中世前期の遺物が少量出土し、12世紀後半～13世紀代に比定される。

弥生時代

SX-04はグライ化したシルト質土層である。縄文土器が多量に含まれるが、弥生時代中期末～後期初頭頃の弥生土器が数点出土した。この層では、自然木の株が2基検出され、正位置で根も見られることから、この時期に生えていた樹木であろう。また、加工木の可能性のある木材が1点出土した。しかしながら、この層では遺構の形成を確認できていない。SX-05は、弥生時代前期末頃に比定される有機物を含む薄い砂層である。ラミナ状の堆積が視認されることから、この段階においては、少量ながら「谷1」に流水があったようである。この層に伴って調査区東側で、南北方向を主軸として礫・木本類が帯状に集中する(SX-20)。長さ約0.5～1.3mの木片が幅約1mの範囲内に



第7図 第100次調査区遺構略測図 (S=1/300)

数本、平行に密着した状態で検出され、さらに類似した木片がその南北に近接して分布し、複数の木片が列状に並んだ状況を呈して出土した。そして、さらにその周囲に礫が密集する。礫は直径10cm～20cmのものが多数を占め、木片を中心として東西幅約2m以上の範囲に、これも帯状に南北方向に分布する。木本類の掘え付けに伴う地業痕跡や杭等の人工的な設置痕跡は現況では検出できておらず、現況では自然堆積と考えられる。しかしながら、礫・木本類が特異な状況で密集することから、例えば木道等の遺構の一部である可能性もある。SX-05からは下城式裏片が1点出土し、時期は弥生時代前期末頃に比定される。また、SX-04出土木本類の一部には、鉄器による加工痕が観察される。

縄文時代後期前葉頃

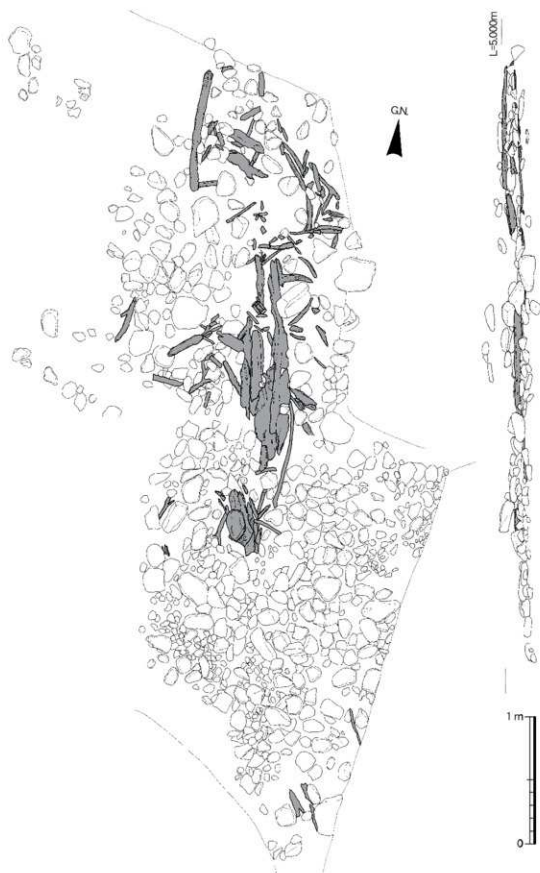
現況では調査区の約3分の2で、この面(SX-35)を検出しているが、ほぼ全面に亘ってドングリ貯蔵穴・土坑が密集し、重複関係を持ちながら展開する。遺構、有機物の保存に配慮し、貯蔵穴の多くは平面で検出した段階以上の調査を行っていない。従って、土坑の重複関係については判然としにくい部分があるが、少なくとも35基以上の土坑が存在する。また、個別の遺構の性格については、多くの土坑で埋土内にドングリが含まれていることから、本調査区で検出された土坑の大部分はドングリ貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴SK-09の土坑底付近で縁帯文系土器の破片が出土したことから、この土坑群は後期前葉頃に比定される。本調査区に隣接する第82次調査区においても当該時期のドングリ貯蔵穴群が検出されているが、調査面積がより広いにもかかわらず、貯蔵穴の基数は遥かに少なく、本調査区での密集性が指摘される。

また、検出面の標高についてもかなりの高低差が認められる。第82次調査区では標高4.0m～4.5mでドングリ貯蔵穴群の上面が検出されたのに対し、本調査区では標高2.7m～3.5mで検出されている。また、ドングリ貯蔵穴の深さについても差異が認められる。第82次調査区の貯蔵穴は、深さ0.7～1.2mで土坑底が検出されるが、本調査区の貯蔵穴は深さ0.2～0.5mで土坑底が検出されており、明らかに浅い。また、平面規模から見ても本調査区の貯蔵穴の方が小型である。

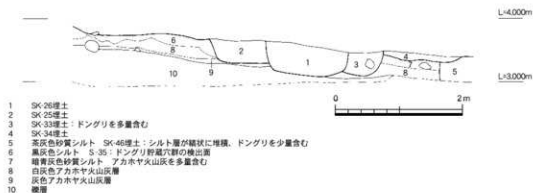
こうした現象の要因として、現在の調査成果から一つの解釈を提示しておきたい。本調査区のドングリ貯蔵穴群は規模の大きな「谷1」

遺構No	遺構検出面標高	遺構底標高
SK-09	2.7m	2.0m
SK-15	3.0m	2.8m
SK-07	3.1m	2.6m
SK-13	3.2m	3.0m
SK-46	3.4m	3.0m
SK-26	3.6m	3.1m

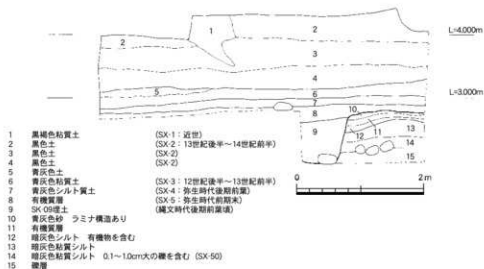
第1表 第100次調査区貯蔵穴標高



第8図 第100次調査区SX-20平面・見通し図 (S=1/30)



第9図 第100次調査区中央壁土層断面図 (S=1/60)



第10図 第100次調査区東壁土層断面図 (S=1/60)

に形成されており、地下湧水量も第82次調査区の位置する「谷2」に比較して多かったものと考えられる。ドングリ貯蔵穴はその性格上、湧水、滞水層まで掘り下げるものであるが、本調査区は、標高が高く地下水量も少ない第82次調査区に比べ、土坑深度が浅くても湧水が得られたために、貯蔵穴群の深度が浅いのではないだろうか。

また、本調査区のドングリ貯蔵穴は全般に浅いが、調査区南東で検出される貯蔵穴SK-09は例外的に深い。同一の調査区内であっても、地下水の湧出量が微地形差のために、地点によって異なる事が想定される。本調査区では各貯蔵穴の深度から、調査区の北半で潤沢な湧水があったと考えられる。調査区全体が北に向かって傾斜することから、「谷1」の谷底が調査区より北側にあることを想起させる。また、調査区は西から東に傾斜する。従って、後期前葉段階の「谷1」においては、西から東への現在の谷筋に沿った流水を想定するべきであろう。一方で、第82次調査区の地形から想定される流水の方向は、「谷2」では「舌状台地」のラインに従って、東側に向かい、第100次調査区までは流水は至らないようである。このため、調査区南東に位置するSK-09には流水が及ばず、検出面標高が低いにもかかわらず、深い土坑を掘っていると想定できる。

しかしながら、両者において検出されたドングリ貯蔵穴群の土坑底標高にあまり差異が認められないことから、遺構上面の削平によって両者の土坑深度に差異が生じた可能性も否定できず、この問題が解決されれば、遺構分布からみた縄文人の谷地利用の実態を示唆し得る現象と期待されるものである。

縄文時代早期中・後葉～末頃(アカホヤ降下以前・降下段階)

今年度の調査では後期前葉頃の遺構面(SX-35)で調査を終了しており、より下位の層の調査は行っていないが、早期中・後葉～末頃の環境復元において若干の知見が得られた。SX-35直下にはアカホヤ火山灰層が堆積している。この点は第82次調査区と一致するが、第82次調査区でアカホヤ火山灰層が約80cmの安定した厚さで堆積し、火山灰本来の色調をほぼ保った状態で検出されたのに対し、本調査区ではアカホヤ火山灰層の厚さは地点によって異なり、酸化して黄灰色を呈した箇所もある。

調査区の西、東壁ではアカホヤ下位の堆積層が観察できる。西壁では粗砂を含む礫層であり、川原のような堆積状況を示す。東壁ではシルト質土層、粘質土層が竊状に堆積し、各層にラミナが観察される。東壁では、アカホヤ火山灰層は見られないが、調査着手前の試掘時の土層観察では、類似する砂質のラミナ堆積層がアカホヤ火山灰層下位に薄く確認された。したがって、この砂質層はアカホヤ降下前に形成されたことが推測される。調査区西、東壁ともアカホヤ下位がラミナの見られる水性堆積層であることから、アカホヤ降下以前には本調査区はごく緩やかな流水域であったと考えられる。

調査区東壁の南隅ではより下位の堆積層が観察できるが、ラミナ状の堆積層直下の礫混じり黒色層は第82・3次調査区のアカホヤ直下で検出された層と同一であり、そしてさらに下位では、同じく第82・3次調査区で姫島産黒曜石製大形石核が出土した礫層が検出された。

調査区東南隅で「谷2」の堆積層が検出され、かつアカホヤ火山灰降下段階に本調査区が滞水域となっていることは、姫島産黒曜石製大形石核が残された早期中葉～後葉段階より、早期末頃の「水場の遺構」設置までの環境を復元する上で新たな知見であると言える。しかしながら現況では流水方向は確定するにいたっていない。

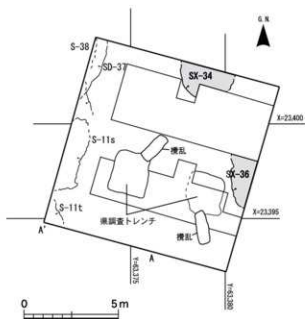
(6) 横尾道路第102次調査

第102次調査区は、横尾貝塚の東側隣接地で、中尾川の左岸に位置する。模式図の「推定微高地」の南東隣接地に相当する。横尾貝塚の範囲確認ならびに貝塚周辺部における縄文時代の遺構把握を調査の主目的とする。

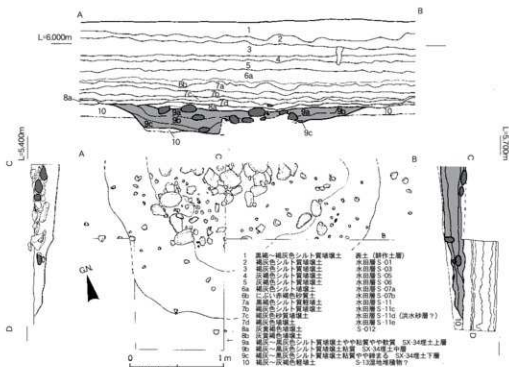
表土中に貝殻の散布が認められたことから、確認調査に先立ち、表土サンプリングを行い、貝殻を含む遺物の分布状況について検討した。その結果、貝塚南東部に隣接する地点に自然遺物の集中部が認められ、貝層が残存していることも想定された。そのため、下位の状況を把握するためにトレンチを設定し、調査を実施した。

表土直下には水田層が検出され、その中位において貝殻を包含する堆積層(混貝土層)が確認できる。混貝土層ならびにその下位の水田層からは近世陶磁器が出土し、横尾貝塚からの後世の崩壊による二次堆積であることが判明した。

また、水田層の下位には縄文時代～中世の遺物を包含する堆積土層(SX-12)が認められ、その下位から集石遺構(SX-34・36)が検出された。両者ともに被熱や破砕がみられる礫が一定量認められ、前者からは古代の土師器甕片や縄文時代早期の無文土器深鉢乳房状底部片など、後者からは土師器片や弥生土器甕片が出土



第11図 第102次調査区遺構略図 (S=1/200)



第13図 SX-34集石遺構及び北壁中央付近土層 (S=1/40)

しており、部分的な掘り下げしか行っていないため帰属年代は断定できないものの、現状では両者ともに古代～中世段階の遺構と考えられる。

この集石遺構が検出される堆積土層(SX-13: 黒褐色重粘土)は、東側に向けて緩やかに傾斜している。現状で出土遺物は無く、有機物をわずかに含み湿地性堆積物と考えられ、ある段階には湿地が広がっていた可能性が示唆される。また、その下位に認められる礫層は、調査区西側では平坦部が認められ、東側に向けて緩やかな傾斜が認められる。西側には平坦な段丘面が存在し、東側では緩やかに傾斜する。

先述の通り、当該調査区の西側には「推定微高地」が存在し、その南東端部に横尾貝塚が形成されていることを踏まえれば、今回調査で縄文時代の遺構確認は出来なかったものの、西側の平坦部については、貝塚が形成される「推定微高地」の基盤をなす段丘面の存在を示唆する地形環境の情報を得られた。

(7) 横尾遺跡第103次調査区

第103次調査区は、模式図の「谷1」の中央部付近に位置する。第100次調査区と同様、「谷1」における縄文人の活動痕跡ならびに地形、堆積環境、植生等の変遷について検証することを主目的とし、調査を行った。

堆積層は表土下位で大きく4層に区分できる。S-1は、厚さ約2mの砂礫層である。大きな礫や粗砂が多量に含まれ、「谷1」の頃から開口部に向けて大きく傾斜することなどから、ごく短期間に形成された谷堆積層と考えられる。S-2は、厚さ約80cmの礫をほとんど含まない粘土とシルトの互層堆積である。暗茶色の粘土層には木本類が大量に含まれる。

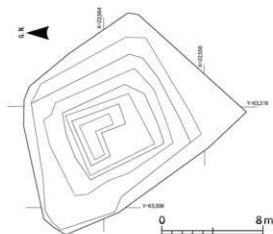
S-3は、アカホヤ火山灰層である。火山灰本来の色調に近い白灰色を呈し下位では良好に遺存し、厚さ約1mである。第82次調査区と同様に厚い堆積であり、級化現象が認められる。ただし、アカホヤ火山灰層中には間層として有機質堆積層が入り、また明確にラミナ状堆積が確認される点は、第82次調査区における状況と大きく異なる。

S-4はアカホヤ火山灰直下の粘質土層で、この層からも大量の木本類が出土した。アカホヤ火山灰降下以前の「谷1」の環境を復元するために土壌サンプル、木本類を採取した。

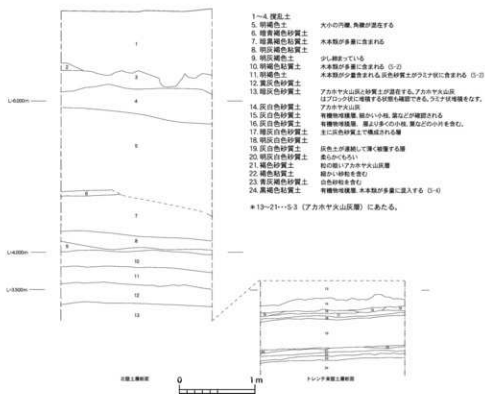
各堆積層からは遺構が検出されず、遺物の出土も絶無に近い。調査の主目的である縄文時代の遺物として、S-1から非常に磨耗を受けた後期前葉頃に想定される縄文土器片が1点出土した。この近辺に縄文時代の集落域が及んでいたことを示唆する遺物と言える。

本調査地点は、現地地形において「谷1」のほぼ中央部、すなわち谷底付近に位置する。S-2以下の堆積層が全てほぼ水平に堆積することから、縄文時代の旧地形も同様に、谷底の地形であったことが推測される。ただし、現地表面から3m以上の深さでアカホヤ堆積層が検出されており、現地地形よりもはるかに谷底が深かったことは明らかである。おそらく縄文人たちが谷地形を活用した範囲からは少し外れている可能性が高いものと考えられる。

縄文時代の遺構は確認できなかったとはいえ、縄文時代の環境については、調査成果からある程度の復元が可能である。アカホヤ火山灰層の降下段階と考えられる下位では酸化状態を示しながら厚く堆積していることから、当時は「谷1」が静水環境であったと推定される。また、アカホヤ堆積層の上下にある水性堆積と考えられる粘質土層に多量の本木類の包含が見られることから、アカホヤ火山灰降下の前後の時期においても、この地点は自然堆積物が水または泥の中に沈殿するような環境下にあったと推測できる。アカホヤ降下前後の谷の中の環境変遷を復元する上で良好な資料が得られており、今後の整理、分析による成果が期待される。



第14図 第103次調査区 (S=1/300)



第15図 第103次調査区内壁及びトレンチ東壁土層図 (S=1/50)

(8) 横尾遺跡第104次調査

横尾遺跡第104次調査区は、大分市大字横尾字江又に所在し、横尾貝塚を東に見下ろす中位段丘面上に位置している。調査区は西からC・A・B区と3区に分かれており、総面積は約385㎡である。現代の水田開発にともない階段状に改変されているため、地形は旧状を留めていない。

調査区東側には中世段階の堆積層により埋没している模式図「谷2」の存在が想定されているが、この堆積層に内包されてこれまでに大量の縄文時代の遺物が確認されている。遺物の遺存状態と移動の方向・立地条件などから、本調査区周辺は縄文時代後期前葉頃における居住域と推定される。今調査の目的は、縄文時代の居住空間の確認ならびに段丘を形成する礫層などの堆積状況を把握することにある。調査の結果、古代～近世段階の遺物群が確認された。以下、時代ごとに様相を述べる。

古代

当該期の遺物が確実に伴う遺構は、A区でのみ確認した。これらの遺構は、東に向けて傾斜する茶褐色粘質土層を検出面として、柱穴群・土坑が展開している。主要遺構としてはSK-20があげられ、この土坑からは豊後大分型甕とともに土師器蓋・黒色土器A類高台付杯が出土しており、遺物の時期は9世紀代のものと考えられる。柱穴群についても、9世紀代の土師器片が柱穴埋土中から出土するものが認められるものの、極めて少ない。また、遺物の出土を見ない他の柱穴についても、埋土の類似性からほぼ同時期と考えられる。

中世

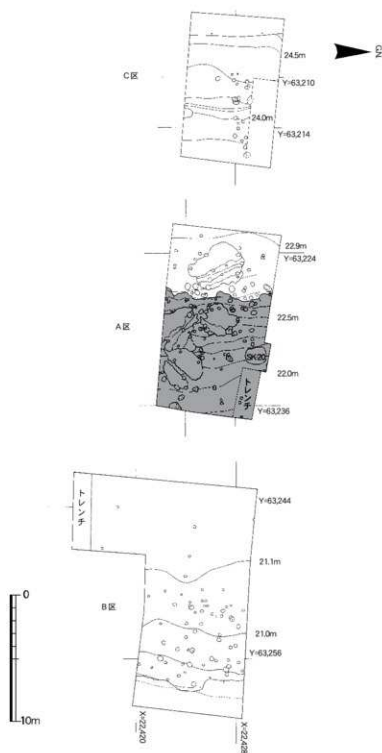
A区では、前述した茶褐色粘質土層の上位において黒灰褐色土層(第16図の網掛け部分)を検出した。この黒灰褐色土層は、近現代の耕作土・水田層により削平を受けているものの、A区の東半分においては良好に残存していた。この堆積層は、9世紀代の土師器を主体としつつも同安窯系青磁碗I-1bや14世紀代の土師質鍋が内包されていることから、現段階では中世段階の堆積層と考えられる。

近世

近世段階の遺構については、B区の東側において柱穴群を検出したが、建物跡を復元することはできなかった。

今回調査では、A・B・C区的全調査区にわたり遺構が確認できたものの、調査目的としていた縄文時代の居住域を推測できるような遺構は検出されなかった。また、A区において幅1.5m・長さ4mのトレンチを設定し、古代の遺構検出面である茶褐色粘質土層およびその下位層の調査を行ったが、期待されていた縄文時代の遺物や遺構は皆無であった。しかしながら、調査区周辺の緩斜面地では古代を上限とした遺構の展開が認められており、その過程において土地の改変が行われた可能性も十分推測できることや、中世段階の黒灰褐色土層に姫島産黒曜石の小剥片がある程度含まれていることから、104次調査区のある段丘緩斜面地は、依然として縄文時代の居住空間であった蓋然性が高いと考えられる。

あわせて、段丘を形成している土質の把握と段丘の形成時期を確認するために、B区において幅1.5m・長さ6mのトレンチを設定し掘り下げを行った。その結果、茶褐色粘質土層の下位からは礫層・粘質土層が検出され、それらは東に向かって緩やかに傾斜し、これらの層が段階的に堆積して段丘を形成していると想定できる調査結果が得られた。礫は拳大から指先大で、いずれも円磨度の高い円礫である。また、粘質土とした層中には砂・小礫の混じりが認められ、比重の重いものが下位にある、級化現象が認められた。以上から、茶褐色粘質土層の下位礫層については二次堆積と考えられるものの、段丘を形成する礫・粘質土層は自然堆積層で、河成堆積に起因すると考えられる。遺物を内包せず、特徴的な降下火山灰層なども確認できなかったため、その形成時期については確定できなかった。



第16図 第104次調査区遺構略測図 (S=1/300)

(9) 横尾遺跡第105次調査

第105次調査区は、横尾貝塚より北西約167mの地点で、比高差約12mの中段段丘面上に位置する。

中段段丘の下位に展開する模式図「谷1」周辺の調査により、第82次や第87次調査では、大量の縄文土器ならびに石器が出土している。その遺物の遺存状況より、中段段丘面上の縁辺近くに縄文時代の集落域が展開する可能性が考えられ、段丘面上についても調査の必要性があると判断された。当調査の目的は、縄文時代の遺構の確認及び旧地形の把握である。

当調査地は旧水田耕作土により覆われ、下層に黄褐色土層が薄く堆積する。これは、いわゆる水田盤と考えられる。第3層は黒色土層であり、有機物を含有し堆積した土層と認められる。第4層は、段丘礫層を母材とする黄褐色ブロック土と灰褐色土が混在する層である。

第4層の下位に位置する段丘礫層上面において数基の遺構を検出している。SD-002は溝状遺構である、長さ約12.9m、幅約0.9m、深さ約0.24mを測る。型紙刷りをを用いた磁器片が出土したことから、明治期以降に形成された可能性が考えられる。SX-009は長軸約0.84m、短軸約0.72m、深さ約0.38mを測り、楕円形状の検出プランを有する土坑である。瓦、磁器片等が出土する。瓦より、近代以降に廃棄されたと考えられる。また、埋塞2基、ピット群等を検出している。ピット群中には柱痕を明確に残す遺構や根石を有する遺構を確認することができ、柱穴跡と判断される。

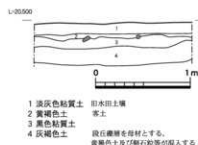
当調査区において、縄文時代に関する遺構及び遺物は確認されていない。調査区全体の遺物量は少ないが、近世、近代を中心とする遺物がほとんどで、当該期以外の遺物は皆無に近い。この点より、近世から近現代にかけて積極的に土地利用された可能性が最も高いと判断している。

(10) 横尾遺跡第108次調査

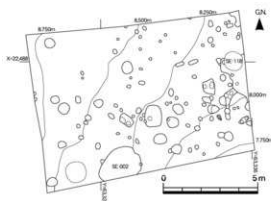
横尾遺跡第108次調査区は、横尾貝塚より北北西に約100mの地点であり、模式図における「舌状台地」先端近くに位置する。調査の目的は、縄文時代に帰属する遺構の確認及び旧地形の把握にある。



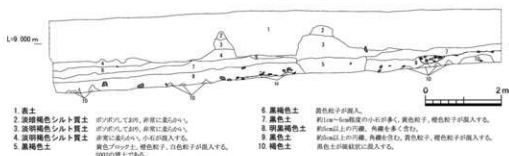
第17図 第105次調査区遺構略図 (S=1/200)



第18図 第105次調査区南壁土層図 (S=1/40)

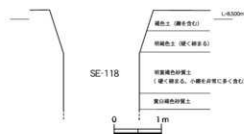


第19図 第108次調査区遺構略図 (S=1/200)



第20図 第108次調査区東壁土層図 (S=1/100)

表土より第9層までは現代の客土である。第9層は円礫・角礫が多く混入する遺物包含層である。遺物は、近現代から縄文時代後期の土器片が混入する。第10層は黒色土を斑文状に混入少量だが礫を含む褐色土層である。この層は北西部～南東部に向けて緩やかに傾斜し、その上面で遺構を検出した。今回検出された遺構は土坑や柱穴群が主体であり、出土遺物が僅少であるため、時期の確定は困難ではあるものの、遺物の所属年代から概ね中世段階に比定されるものと想定される。また第10層の下位には、硬質の明褐色土層ならび



第21図 第108次調査区
SE-118壁面土層堆積模式図 (S=1/80)

に砂質土層が第10層と同様な傾斜傾向を示しながら堆積しており、遺構の存在は期待できない。また、第96-2次調査や第104次調査で確認された中世段階の造成土は、本調査地では認められなかった。

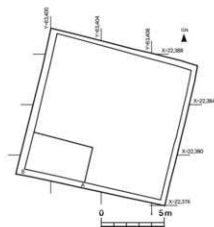
旧地形の把握については、調査区における四方の壁面土層の比較、及び近現代の井戸跡であるSE-002、SE-118の壁面土層を観察し、検層する方法を用いた。調査区の南壁における第10層は、東側に向かって傾斜し堆積している状況が認められる。SE-002の南壁面を用いて、下層の堆積状況を確認した結果、同様の傾向が認められた。また調査区東側に位置するSE-118の東壁における下層の堆積状況は、南北方向でほぼ水平堆積であると理解された。本調査地は、南北方向ではあまり傾斜がない、南東方向に緩やかに傾斜する一帯であると考えられる。

今回の調査では縄文時代に比定される遺構の確認はできなかったものの、当該地の模式図の「谷2」につながる緩斜面に位置していたものと判断される。

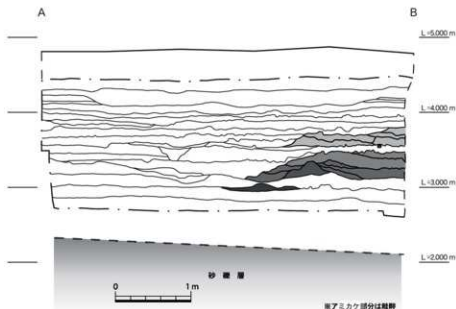
(11) 横尾遺跡第109次調査

横尾貝塚の東南東約50mに位置し、模式図における「微高地」東側であり、中尾川右岸に位置する。調査区は第102次調査区の東側、現中尾川の対岸に立地することから、第102次調査で存在が示唆される段丘面の範囲確認及び段丘面上の縄文時代の遺構検出、また、縄文時代の古環境復原を目的とする。

平面と土層堆積観察を主目的としたトレンチを調査区に設定し、現表土(現水田)から中世段階まで続く水田層を確認した。中世段階の水田層には大畦畔が検出され、幅約1.6m超を測り、下位には最低三回の畦畔造成の痕跡が確認できる。表土下約1.6m、標高約3.0mまで水田層と考えられ、その下位の湿地性堆積物と考えられる粘質



第22図 第109次調査区 (S=1/300)



第23図 第109次調査区南西壁土層図 (S=1/50)

土層には、植物遺体が検出され、湿地状の環境であった可能性が示唆される。また、標高約2.3～2.1mで西側に向けて緩やかに傾斜する砂礫層？と考えられる堆積層を確認した。

遺物は、中世段階の遺物が散見でき、龍泉窯系青磁碗(1-4類)、瓦器焼片、土師器片が出土し、縄文時代に帰属される可能性がある遺物としては結晶片岩製打欠石鍾があるが、時期比定可能な遺物は確認できていない。

当調査区では縄文期の遺構、遺物に関しては確認できていない。また、調査区に設定したトレンチ内では低位段丘面を確認できなかった。また、第102次調査区で見られる礫層を含む堆積状況は認められないことから、第102次調査区東側では湿地(低湿地)環境が想定できる。さらには、ボーリング調査の結果において、第109次調査区北側で砂礫層の堆積が見られ、南から北へ傾斜する堆積状況が想定できることから、当調査区においても乙津川起源の砂礫層の存在が考えられる。以上のことから、当該地一帯には旧河道の存在が想定され、旧河川による堆積作用が終息した後に湿地化し、その後水田として土地利用されたものと判断される。

(12) 横尾遺跡第111次調査

横尾貝塚から北北東に約70m、標高約6.0mの地点に位置し、模式図の「推定微高地」北側に相当し、模式図「谷1」と「谷2」の合流点に近接する。調査区周辺は、「推定微高地」北側であり、現状では耕作地であるが、表土上面には貝殻が散在し、小規模貝塚の存在も想起される。あわせて、「谷1」と「谷2」の合流点に近く、縄文時代の居住空間の把握や古環境復元を考える上でも、当調査区での貝層及びアカホヤ火山灰等の堆積状況並びに遺構確認、古地形を含めた様相把握が必要と判断した。

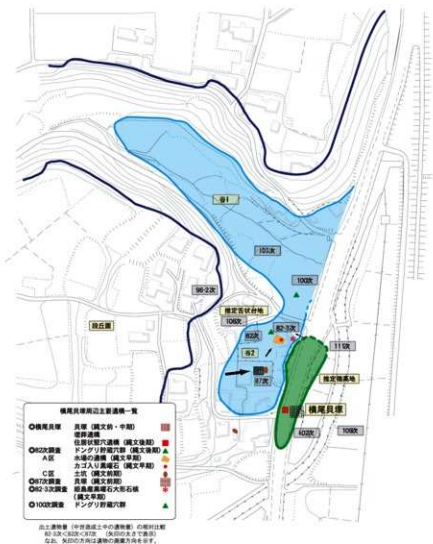
調査方針と調査範囲の確定のため、事前にボーリング調査(φ66mm、深度2m)を実施した。ボーリング調査の結果、想定していた貝層とアカホヤ火山灰は確認されず、小規模貝塚が存在する可能性は低いと推測される。また表土下0.9mに礫層由来と思われる小礫混じりの硬質層が確認できる地点と、表土下2.0mの下位に互層堆積が確認できる地点が看取できた。以上のことから、調査区北側は水性堆積が続くと考えられること、調査区南西側が旧宇図上に地形の高まりがあることなどから、調査区は「推定微高地」の北端部であり、水域と陸域との折衝地点と想定される。これらの調査結果を踏まえ、「推定微高地」及び流水域の範囲、水域並びに硬質層の堆積状況および下位の遺構確認を目的として調査を実施した。

第3章 まとめ

今年度の調査では、横尾貝塚周辺古地形模式図の「谷1」における縄文時代の遺構分布が確認され、当該地の環境変遷についても想定される成果を挙げられたことが特筆される。「谷1」の中心にあたる第103次調査区では、遺構は検出されていないものの、アカホヤ火山灰層の堆積が現状で約1m認められる。その色調は白灰色を呈し、酸化現象も見受けられることから、少なくともアカホヤ降下段階の当該地は潜水環境下であったものと想定される。

また、「谷1」の「谷2」との合流点付近にあたる第100次調査区においては、縄文時代後期前葉段階には調査区のほぼ全面にドングリ貯蔵穴群が展開する。当該期のドングリ貯蔵穴群については隣接する「谷2」に位置する第82次調査区においても確認されており、土坑深度に差異は認められるものの両者ともに地下水位まで土坑を掘り下げて構築されている。

さらに、アカホヤ降下段階の様相については、先述した「谷1」の中位の状況を含め、堆積深度と遺存状況に差異は認められるものの、全体的には酸化現象が看取できるため、潜水環境下であったものと推測される。しかしながら、他地点に比べ標高が低いにもかかわらず、堆積深度が浅く、酸化して黄灰色に変色した地点も見受け

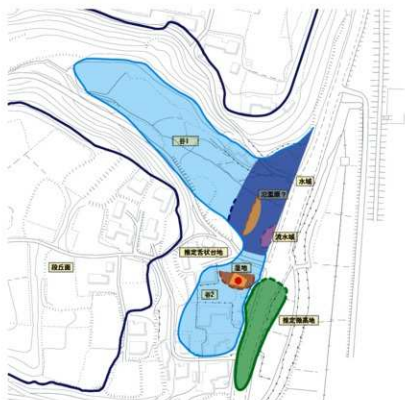


第24図 横尾貝塚周辺推定古地形模式図

られる第100次調査区における現象は看過できず、後期段階のドングリ貯蔵穴群の様相を踏まえれば、貯蔵穴群の掘削をはじめとする後世の削平やアカホヤ降下以前の環境が及ぼした現象である可能性も残されているものと考えられる。

一方、アカホヤ火山灰層直下の状況については、明らかに様相が異なる。前者(第100次調査区)の調査区東側一帯には流水域が認められるのに対し、後者(第82次調査区)には湿地が広がり、そこに「水場の遺構」が構築され、内部に姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で残されるのである。当遺跡はすでに姫島産黒曜石交易の中継地として機能していた可能性が指摘されており(宮内 2003)、また時代がさらに遡り、地理的環境が変化したにもかかわらず、縄文時代早期中頃～後葉頃にも「水場の遺構」が設置された地点周辺に姫島産黒曜石製大形石核が残されていることから、この「谷2」周辺に姫島産黒曜石交易の中継地として機能した「場」の存在が示唆される(大分市教育委員会 2004b)。具体的には、「谷1」と「谷2」の合流点付近に黒曜石の隆揚げ地が想定され、そこにつながる通路として湿地に設置された施設が「水場の遺構」であると考えられる。

このような想定に立てば、黒曜石の原産地が海上に浮かぶ離島であり、主要河川の下流域に姫島産黒曜石交易の中継地が存在し、そこから周辺の消費遺跡へ姫島産黒曜石が招来された可能性が高いこと(宮内 前掲)を踏まえれば、横尾遺跡においては縄文時代早期末段階に乙津川から「谷1」まで水域が及んでいたことを実証する必要がある。この問題点についても、先述した第100次調査区のアカホヤ火山灰層直下に認められる砂層とシルト層の互層堆積状況が解決の糸口になるものと推測され、流水域が想定されるとともに当該地がまさに「谷2」に設置された「水場の遺構」の北側延長線上に位置することも評価できる事象と判断される。さらに、「谷1」の



主要遺構分布図 「縄文時代早期末」

●82次調査 水場の遺構 (縄文早期)
カゴ入り黒曜石 (縄文早期)

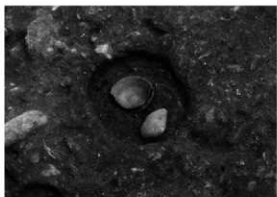
第25図 横尾貝塚周辺主要遺構分布図 (縄文早期末)

東側延長線上に相当し、模式図の「推定微高地」の北側に位置する第111次調査区ならびにその東側で実施した地質調査の結果、現状では時期比定はできていないものの、流水域の存在が示唆される。

以上が、今年度の主要な調査成果である。既往の調査成果から、断片的ながらも各時代の遺跡様相が抽出できるようになってきた中で、今年度の成果は、遺跡内の場の機能について有機的なつながりを想定する契機となるものと期待される。今後は、自然科学分析の結果を踏まえ、各時代の環境変遷と遺構分布を比較検討するとともに、横尾貝塚を中心とする縄文集落構造の解明に努め、横尾地区に縄文集落が形成される要因についても究明することにより、東九州を代表する縄文集落の成り立ちについて考究できる可能性が高い。

参考文献

- 宮内克巳 2003 「大分県旧石器～縄文時代遺跡出土の耶島産黒曜石」『大分県立歴史博物館研究紀要』第4号 大分県立歴史博物館
- 大分市教育委員会 2004a 「横尾遺跡第82・3次調査」『大分市市内遺跡確認調査概報 ―2003年度―』
- 大分市教育委員会 2004b 「横尾遺跡第82・3次調査 D-35・40地点」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.15 2003年度』



第96-2次調査区SK-10（北から）



第96-2次調査区北壁土層



第100次調査区SK-32（東から）



第100次調査区SK-32遺物検出状況（東から）



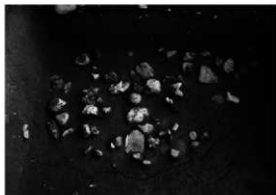
第100次調査区SX-20（東から）



第100次調査区西壁土層



第102次調査区SX-34（北から）



第102次調査区SX-36（西から）



第102次調査区SX-36（南から）



第102次調査区S-26南壁土層サンプル採取



第102次調査区南壁土層東側



第102次調査区南壁土層西側



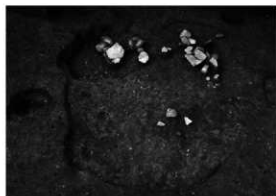
第103次調査区全景（北東から）



第103次調査区北壁土層



第104次調査区周辺空撮写真（南から）



第104次調査区SK-20遺物出土土状況（南から）



第105次調査区全景（南から）



第108次調査区全景（西から）



第108次調査区南壁土層



第109次調査区遠景（北東から）



第109次調査区南壁土層



第109次調査区南壁土層下部



第111次調査区遠景（北から）



第111次調査区近景（南から）

城原・里遺跡

第9次調査



2006



写真1 城原・里遺跡全景写真（上が北）



写真2 遺跡全景写真（上が北）

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

現在調査を進めている城原・里遺跡は、平成14年度、市道の城原・里線道路拡幅工事に伴う第5次調査によって、7世紀中頃～末に比定する評段階の官衙関連施設と思われる掘立柱建物群が確認された事を受け、平成15年度より市内遺跡確認調査を継続的に実施している。平成15年度には、前年度確認された建物が連続的に連なり、大きく4段階に変遷される建物が確認された。特に1期～3期においては、主軸方向を真北よりやや西側に指向する掘立柱建物群が、ほぼ同一地点において一定の規格性(L字状もしくはコの字状)をもって配置・変遷がなされており、建物施設の範囲をある程度想定できるようになった。平成16年度では、建物群が西側に展開し、倉庫群を確認することができた。今年度の第9次調査は、昨年度調査を行った第8次調査区の南西側を主な調査対象とし、建物施設の推定範囲における南西側の建物の有無確認、ならびに遺跡の性格を確認するために平成17年11月1日～平成18年3月28日にかけて実施した。

(2) 調査組織

調査指導

坂井 秀弥 (文化庁文化財部記念物課主任調査官)

岡田 康博 (文化庁文化財部記念物課調査官)

山中 敏史 (独立行政法人奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 遺物調査技術研究室長)

後藤 宗俊 (別府大学教授)

高橋 徹 (大分県教育庁文化課課長補佐)

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

文化財課 課 長 佐藤 功 参 事 玉永 光洋

管理係 管理係長 安東 時男 主 査 平野 勝敏
指導主事 姫野 公徳 主 任 桑原 治 安部 一成
主 事 加藤 キヌ

文化財係 課長補佐兼文化財係長 讃岐 和夫

専 門 員 塔島 光司 坪根 伸也

指導主事 後藤 典幸

主任技師 池邊千太郎 塩地 潤一 高畠 豊 河野 史郎

技 師 中西 武尚

主 事 永松 正大 佐藤 道文 五十川雄也 古川 匠

嘱 託 井口あけみ 荻 幸二 宮田 剛 奥村 義貴 菊谷 史穂

羽田野達郎 梅木 信宏 梅田 昭宏 佐藤 孝則 松竹 智之

松尾 聡 小住 武史 羽田野裕之 水町 裕子 衛藤 亮介

佐藤 暁子 服部 真和 森岡 晃司 山本 哲也 仲矢 咲紀

姫野 久恵 若牧 善満 古田 陽 山下 美郷 松田幸之助

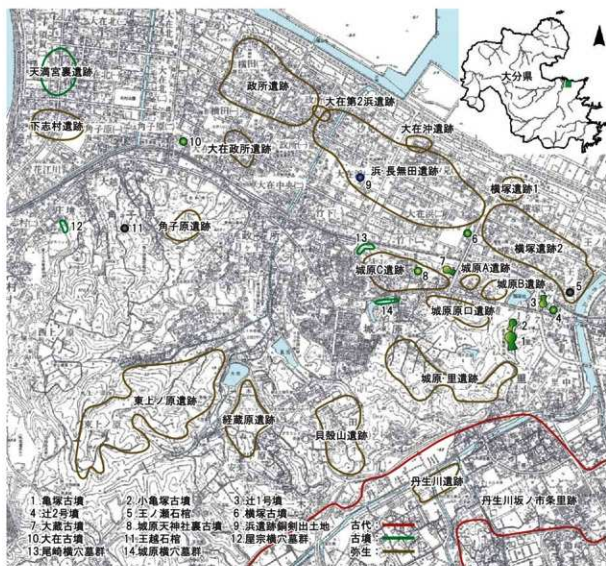
発掘調査従事者 瓜生田鈴子 倉重 史子 近藤 智史 佐藤 良江 林 スミエ 日名子 隆

姫野 尚之 姫野 美香 帆足由紀美 松崎加代子 薬師寺徳子 幸 イツ子

整理作業従事者 小山田裕子 澤田 香織

調査・報告に際して下記の方々には多くのご指導を頂いた。(敬称略)

小田富士雄(福岡大学名誉教授)、西別府元日(広島大学教授)、松原弘宣(愛媛大学)、西海道官衙研究会の方々



第1図 城原・里遺跡とその周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 城原・里遺跡の調査区位置図 (1/5,000)

第2章 調査の概要

城原・里遺跡は、大分市大字里に位置し、東西に延びる標高約40mの丘陵東端に所在し、約400m離れた西側には海部郡衙の政庁と考えられている第2次～4次調査(中安遺跡)が位置する。調査地は、同道跡の中でも比較的微高地形に立地している。

今回の調査は、A～E区の5ヶ所に調査区を設定した。A区は、第7次B区の東側に位置する。B区は、第8次B区と隣接し、第8次B区を一部含む。C区は、第7次C区の東側にあり傾斜した地形にある。D区は第8次C区と隣接し、第8次C区を一部含む。E区は、第7次B区と第7次D区の間に位置する。以下に各調査区についてその概要をまとめる。

A区

遺構は、大小17基のピットが確認された。大型のピットは、直径約1m～1.3mのもので、小型のピットは、直径約0.2m～0.3mのものがほとんどである。調査区が狭いことやピットの大きさにばらつきがあり、それぞれのピットとの関連は不明である。これらの遺構の時期は、遺物が出土していないため不明である。

B区

調査区からは、第8次B区の建物跡を含めた掘立柱建物跡の4棟をはじめとし、櫓列跡、堅穴住居跡、多数の柱穴が検出された。ここでは、建物跡の配置状況や主軸方向ならびに一部の重複関係から遺構の性格を考える上で重要と思われる2つの建物跡群を取り上げたとしたい。なお、調査区の南側では、第8次調査で確認された中世の堆積土が東西に広がって確認しており、この堆積土からは、摩滅した瓦質のすり鉢、糸切り底の土師器が見られた。この堆積土を剥ぐとSB033・SB034等の建物跡や柱穴等を検出することができた。

●主軸方向を真北より西に5°振る建物群(SB033・SB034)

2棟の建物跡は、いずれも調査区の南側で確認され、東西方向に桁行が延びた掘立柱建物跡である。SB033の規模は、5間×2間で身舎面積が33.44㎡である。SB034は、SB033の東側に平行した場所で検出した。その規模は4間×2間で身舎面積が24.48㎡ある。SB033と比較すると身舎面積と柱穴の規模はやや小さめである。両者とも時期に関しては検討する余地があるが、現状では主軸方向が西に5°に振れていることから前年度までに確認されている建物群2・3期と同方位である関連性が指摘される。

なお、SB033の西側には、櫓列跡と想定される柱穴の並びを確認した。これは、施設の南西隅における外郭施設に関連するものとみられ、5次調査区の櫓列跡(SA010)と同様な構造である。

●主軸方向を真北より東に2°振る建物群(SB031・SB032)

2棟の建物跡は、それぞれの柱筋は揃わないが、SB031は南北方向を主軸として、南北6.3mの建物跡である。SB032は第8次調査区のSB022・SB031に直行する。SB032の建物周辺では、後世の削平が著しく、残存状況が良好ではないため柱穴の重複関係に不明な点が多い。これらの建物跡は、SB022と堆積土が似ていることや方位が同じことから、7世紀後半代に位置付けられる。

C区

主な遺構は、柱穴が1基確認されただけである。その他、幅約0.5mの南北方向に延びる溝状遺構が確認された。この時期は不明であるが、表土層の埋土と溝の埋土に差が見られないことから新しい年代が考えられる。土層の断面観察からは、この部分が段落ち状になっており、人為的に削平されたものと考えられる。

D区

遺構は、多数の柱穴、住居跡1基、中世の堆積土が確認された。柱穴に関しては、調査区の中央をB区のSB033・SB034の北側桁行軸の延長線上に柱穴が6基並んで確認された。これらの柱穴列(SA035)は、現状では櫓列状になっているが、調査区が狭小のため、本来、建物跡になる可能性が高い。これらの柱穴の最大直径は

約0.9m～1.0mである。深さは、現在確認されているもので約0.5mである。遺構の時期は不明であるが、柱穴列の方位からして建物群3期に該当する可能性がある。S005からは、現調査で時期の判明できる唯一の須恵器蓋の破片(第4図R001)が出土しており、この特徴から7世紀後半代に収まるものと考えられる。住居跡は、調査区の南東で確認されており、柱穴や中世の堆積土との重複関係から古墳時代以前のものであると考えられる。

なお、B・D区の南側は、各調査区より一段低く東西方向に長く延びたテラス状の平坦面が存在し、建物群との関連性が注目される。

E区

遺構は、多数の柱穴が確認されている。柱穴は大小様々であるが、後世の削平が著しく、隣接する7次B区の柱穴との関連性は不明である。このため、隣接する7次B区で確認されたSB015は、柵跡になる可能性も考えられる。時期は不明である。

第3章 まとめ

今回の調査では、B・D区において検出された掘立柱建物跡(SB033・SB034)と現状で確認されている柵列跡(SA035)が、最も注目すべき遺構である。

これらの建物跡は、出土遺物が少量のため明確に時期を判定するのは困難であるものの、これまで調査を行った第5・7・8次調査区で検出された建物方位や配置状況から建物群2期あるいは3期に該当する。このことは、当該期の外郭施設が南側にも存在していたことを窺わせるものであり、7次C区でL字に確認された柵列跡と今回確認されたSB033・SB034・SA035の柱筋がそろっていることもわかり、5次調査・7次調査で確認された2期・3期の建物群とともにコの字型の配置を構成する可能性が高くなった。

9次A区・C区の調査所見からは、東側に掘立柱建物跡となるような遺構や施設を区画するような溝が確認されていないことから、現状では、SB002・SB016・SA017等が当施設の東限と考えられる。さらに、SB033が当施設の西限になる可能性も考えられることから、当該期には東西約60m、南北約50m規模におよぶ範囲内に柵跡・掘立柱建物跡によって区画する施設が展開していたことが明らかとなった。

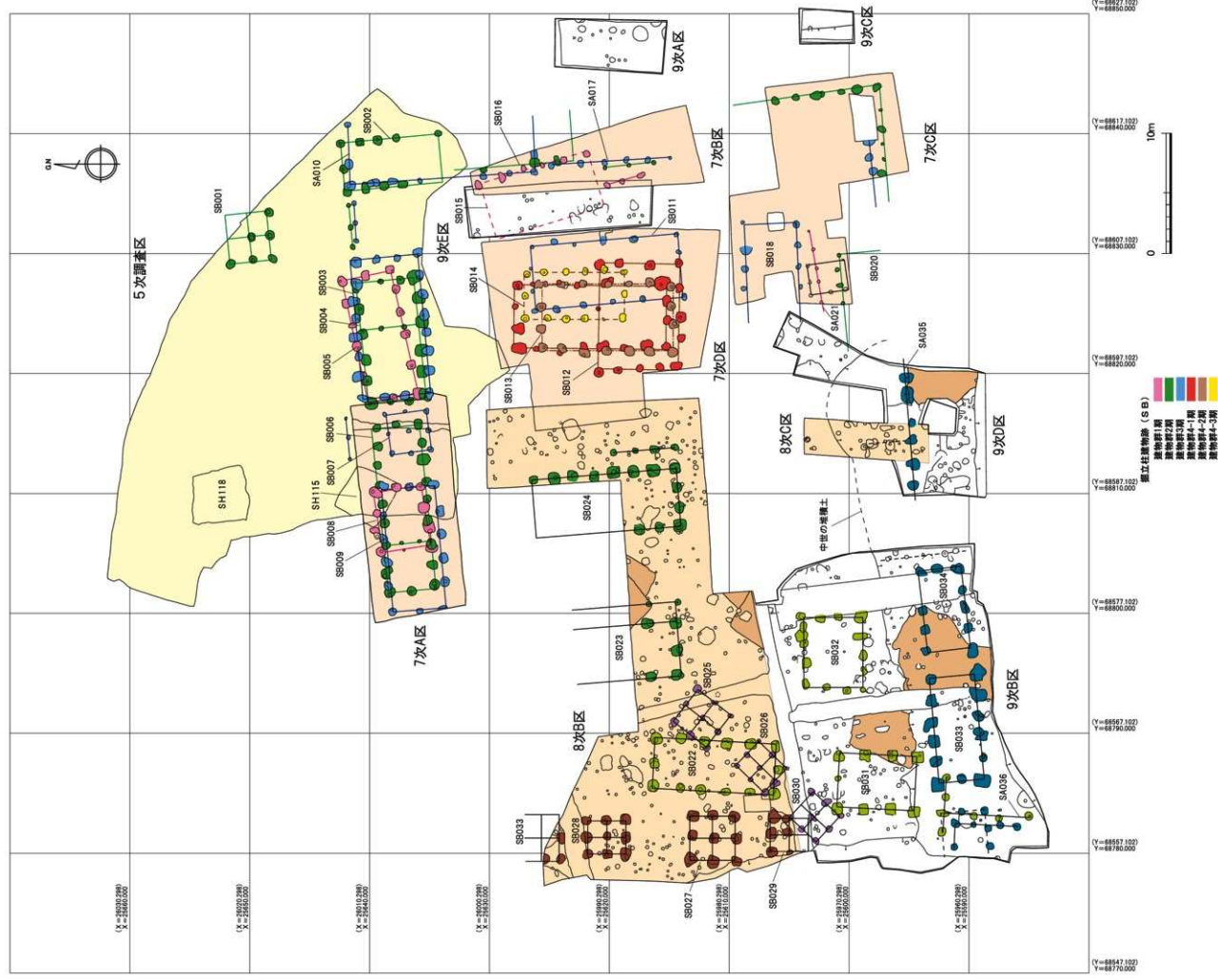
これらのことから、城原・里遺跡第5・7・8・9次調査で確認された建物施設は、7世紀後半段階において非常に区画性が高いと考えられる。今回検出された建物跡とこれまで確認されている中心施設や区画施設の建物跡は、全体的に変則的な配置になる部分が多い。今後、こうした問題点を踏まえ、建物施設全体を総合的に考慮して慎重に検討する必要がある。

	遺構名	規 模	柱間寸法 (桁行×梁行)	建物方位	身舎面積
城原・里 9次	SB031	3間×2間、4.6m×6.3m	2.2m×2.4m	南北N-2°-E	42.83㎡
	SB032	4間×3間、6.3m×5m	1.0～1.6m×1.4m	南北N-2°-E	29.80㎡
	SB033	5間×2間、8.8m×4.1m	1.48～1.97m×2m	東西N-5°-W	33.44㎡
	SB034	4間×2間、6.6m×3.7m	1.55～1.8m×1.7m	東西N-5°-W	24.48㎡

表1 掘立柱建物跡一覧表



第4図 出土遺物実測図 (1/3)



第3圖 第5・7・8次調査遺構平面図 (1/300)



写真1 調査区遠景（北から）



写真2 A区検出状況（南から）



写真3 C区検出状況（南から）



写真4 D区検出状況（北から）



写真5 D区検出状況（東から）



写真6 B区全景（上が北）



写真7 B区SB031検出状況（南から）

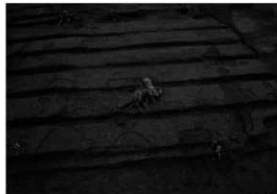


写真8 B区SB032（東から）



写真9 B区SB033検出状況（東から）



写真10 B区SB034（西から）

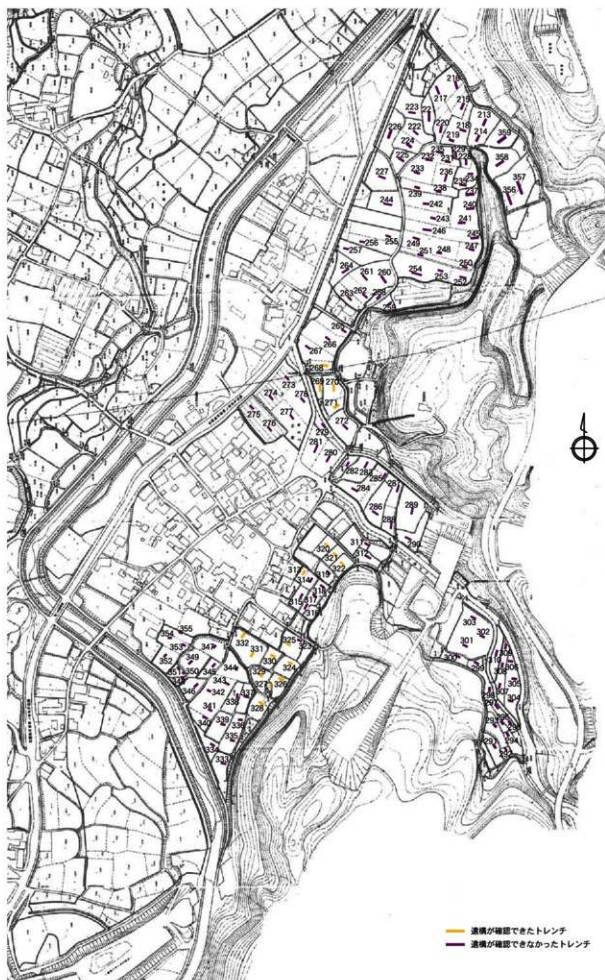
丹生川坂ノ市条里跡

丹 生 遺 跡 群



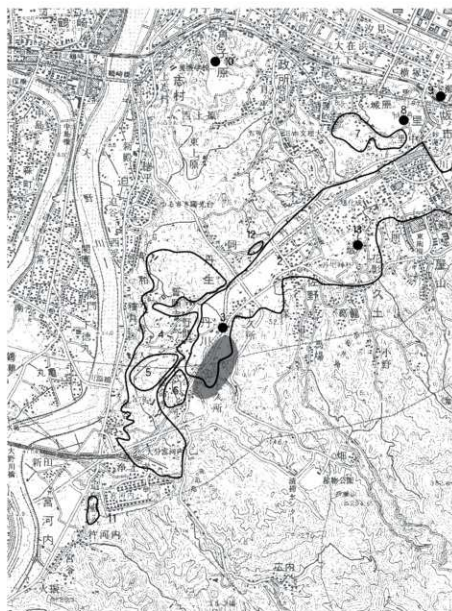
丹生川流域周辺（別府湾を望む）

2006



第1図 トレンチ配置図

第1章 はじめに



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50000) (国土地理院発行「大分」1/50000使用)

1. 丹生川坂ノ市条里跡
(調査対象地域)
2. 丹生川坂ノ市条里跡
3. 大友親著の墓
4. 丹生遺跡群
5. 野間古墳群
6. 延命寺遺跡
7. 城原・里遺跡
8. 亀塚古墳
9. 王ノ瀬石棺
10. 王越石棺
11. 阿蘇入横穴墓群
12. 岡下横穴墓群
13. 原経塚

(1) 調査に至る経緯

大分県・大分市は、平成16年度より、大分市大字丹生・丹川において、県営体育成基盤整備事業(丹川地区)を行っている。その開発事業に伴い、対象地(約42ha)が周知遺跡にあたることから、埋蔵文化財の確認調査・発掘調査が必要となっている。そこで今回は、国庫補助にて確認調査を行い、その報告を行う。予定では本年度と来年度(平成18年度)で全対象地の確認調査を終える予定である。

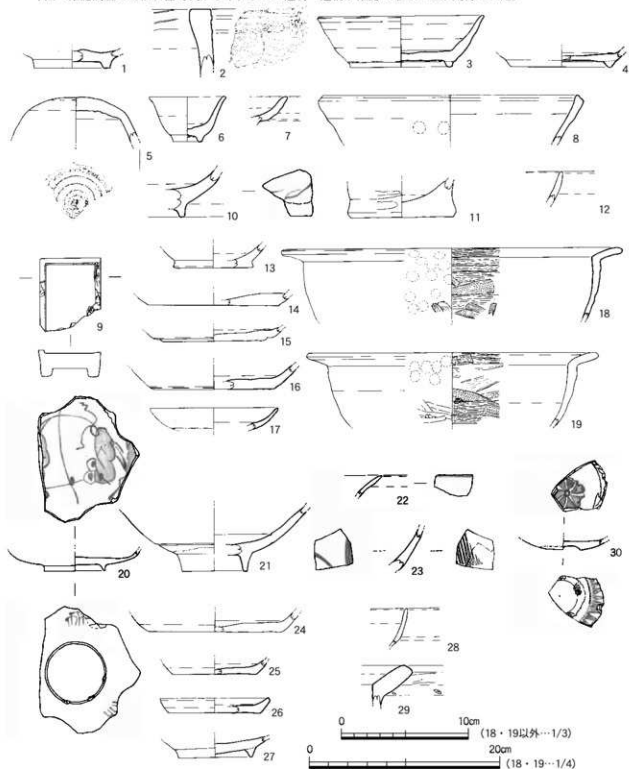
(2) 調査体制

調査主体	大分市教育委員会	調査担当	五十川 雄也
発掘調査従事者	指原 洋嗣	安部 昭子	整理作業従事者 藤原 彰子

第2章 調査の概要

丹生川坂ノ市条里跡・丹生遺跡群確認調査地は、大分市東部を北流する丹生川流域と丹生川と大野川に挟まれた丹生台地周辺に該当する。丹生台地の北側に県内最大級の前方後円墳である亀塚古墳や古代海部郡衙跡である城原・里遺跡が点在している。さらに対象地周辺には、野間古墳群や昭和40年代に古代学協会が行った旧石器時代の調査地、大友氏11代大友親善の墓などがある。

今回の確認調査でも旧石器時代から中世までの遺物・遺構が確認できることが期待された。



第3図 トレンチ出土遺物実測図

第3章 まとめ

今回は平成17年12月31日までの成果を述べる。確認調査はトレンチ調査を行い、第1図を参照すると、約20箇所で遺構・遺物を検出した。遺跡の性格としては、古代～中世の集落跡と推定される。遺跡が確認できた箇所については今後、県振興局と協議を行い、現状保存できる工法で行うように努めるが、工法変更が無理な場合は発掘調査に移行するものである。

ここでは、それぞれのトレンチ(以下、T〇〇〇)から出土した主な遺物を掲載(第3図)し、述べる。

- 1 (T215)は、中国龍泉窯系青磁碗である。高台内側まで施釉する。
- 2 (T218)は、瓦質土器火鉢である。外面上部に2条の突帯を巡らし、その間に雷文帯と思われるスタンプを施す。口縁端部を肥厚させる。
- 3 (T226)は、須恵器碗である。包含層からの出土である。貼り付け高台を底部と胴部の境に巡らす。8世紀後半の所産であろう。
- 4 (T230)は土師器碗の底部である。高台は貼り付け高台である。9世紀の所産であろう。
- 5 (T235)は瓦質の蓋。内面上部に円状に工具痕が残る。
- 6 (T268)は青磁の小碗である。中国産か。S001からの出土である。
- 7 (T270)は瀬戸産で皿であろう。
- 8 (T270)は瓦質土器鉢である。
- 9 (T271)は赤間産の碗である。包含層からの出土である。
- 10 (T289)は中国龍泉窯系青磁碗である。
- 11 (T320)は縄文時代の深鉢の底部であろう。包含層からの出土である。外底は若干上げ底である。
- 12 (T320)は中国龍泉窯系青磁碗である。
- 13 (T326)は土師器碗の底部である。高台は充填状に貼り付ける。
- 14 (T327)は土師質土器坏底部である。底部は回転糸きり後ナデ。底径は10.4cmである。
- 15 (T327)は土師質土器坏底部である。外底はロクロ切り離した後丁寧なナデ仕上げを行う。
- 16 (T327)は土師質土器坏底部である。S003からの出土である。底部はロクロ切り離した後丁寧なナデ仕上げ。
- 17 (T327)は中国白磁皿である。
- 18 (T327)は土師質土器・埴である。内面はハケ目調整、外面はナデ、ユビオサエで器面調整をする。
- 19 (T327)は土師質土器・埴である。
- 20 (T313)は肥前系磁器皿である。畳付け以外のすべてに透明釉を施釉。
- 21 (T329)は中国白磁碗である。外面は釉が高台近くまで施釉される。
- 22 (T329)は中国漳州窯系皿である。内面の口縁端部に1条のラインが巡る。
- 23 (T329)は中国同安窯青磁碗胴部片である。S003の出土である。外面は櫛状施文と内面はヘラ状工具による略化した花文を施す。
- 24 (T330)は土師質土器坏である。底径は10.4cm。外底はロクロ切り離した後丁寧なナデである。
- 25 (T330)は土師質土器坏である。
- 26 (T330)は土師質土器皿である。底部からやや外反しながら胴部が伸びる。
- 27 (T330)は瓦器碗である。高台は貼り付け、底部は押し出している。在地産か。
- 28 (T330)は瓦器碗で、口縁部片である。
- 29 (T330)は土師質土器で埴の口縁部。口縁端部が胴部よりも肥厚する。
- 30 (T348)は中国景德鎮窯系皿である。底部は萐筍底である。内底見込には稔花を染付けし、胴部外面には芭蕉葉文を施す。

今回の丹生川坂ノ市条里跡で、遺構が確認できた箇所は大きく3地点である(第1図参照)。T268～T271は柱穴が密度の低い状況で確認できた。遺物量も少ない。T320・321・322は柱穴が検出できた。密度は高い。出土遺物量は少ない。T313は近世の土坑などが検出された。T324～T332は遺構密度濃く、柱穴・土坑などが確認できた。出土遺物量も多い。3地点とも中世前期集落を主体に展開し、16世紀まで規模を小さくしながら続きそうである。

今回は丹生遺跡群の確認調査も行っているが、期間の関係から省いた。来年度報告予定である。

表1 出土遺物観察表

遺構番号	発掘時期	調査機関	種類	形状	位置(コン)				成層	観察及び説明		出土(古物)	色・質	備考
					北東	北西	南東	南西		外周	内周			
NSU T215	3-1	R292	中国産瓦 瓦葺き	竪	—	1.45+	—	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T218	3-2	R296	土 瓦	瓦	—	5.0+	—	—	瓦土積み 上 げ	ナデ、ヘウ切り ナデ、切ナデ	上長ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	内面文スタンプ	
NSU T226	3-3	R306	瓦 筒	筒	(11.0)	4.0+	(8.0)	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T230	3-4	R285	土 瓦	筒	—	1.4+	(6.8)	—	瓦土積み 上 げ	ナデ、取り付け 高台	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T235	3-5	R300	瓦 瓦	瓦	—	3.6+	—	—	ロ・ク	ナデ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T268 S1	3-6	R284	青 磁	小皿	(6.0)	3.5+	2.3	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	中国産か
NSU T270 S1	3-7	R283	瓦 瓦	瓦	—	2.05+	—	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T270	3-8	R281	瓦 瓦	瓦	(27.0)	4.9+	—	—	瓦土積み 上 げ	切ナデ、切ナ デ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T271	3-9	R304	石 製	鏡	5.4+	4.8	2.1	—	—	ミガキ	ミガキ	—	黄銅	赤銅
NSU T314	3-10	R289	中国産瓦 瓦葺き	瓦	—	3.7+	—	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T320	3-11	R297	陶土器	鉢	—	2.85+	8.0	—	瓦土積み 上 げ	切ナデ、切ナ デ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T320	3-12	R296	中国産瓦 瓦葺き	瓦	—	2.45+	—	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T326	3-13	R299	土 瓦	筒	—	1.8+	(8.2)	—	ロ・ク	切ナデ、切ナ デ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T327	3-14	R301	土 瓦	筒	—	0.95+	(10.4)	—	ロ・ク	ナデ、切ナ、切 ナ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T327	3-15	R294	土 瓦	筒	—	1.0+	(8.0)	—	瓦土積み 上 げ	ナデ	ナデ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T327 S1	3-16	R309	土 瓦	筒	—	1.9+	(9.4)	—	ロ・ク	切ナデ、切ナ デ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T327	3-17	R307	白 磁	皿	—	1.7+	(10.1)	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	大分分製可能
NSU T327	3-18	R308	土 瓦	筒	(18.0)	7.5+	—	—	瓦土積み 上 げ	ヘウ切り、切ナ デ、切ナ	ナデ、切ナ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T327	3-19	R280	土 瓦	筒	(32.0)	7.65+	—	—	瓦土積み 上 げ	ナデ、切ナ、切 ナ	ナデ、切ナ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T313	3-20	R295	瓦 筒	筒	—	1.55+	4.8	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T329	3-21	R282	中 瓦	筒	—	5.0+	(3.2)	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	大分分製可能
NSU T329	3-22	R298	中国産瓦 瓦葺き	瓦	—	1.65+	—	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	
NSU T329 S1	3-23	R303	陶土器	小皿	—	3.2+	—	—	ロ・ク	切ナデ、切ナ デ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	大分分製可能
NSU T330	3-24	R302	土 瓦	筒	—	1.5+	(10.4)	—	ロ・ク	切ナデ、切ナ デ	切ナデ、切ナ デ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T330	3-25	R288	土 瓦	筒	—	1.1+	(6.6)	—	ロ・ク	ナデ	ナデ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T330	3-26	R290	土 瓦	筒	(8.6)	1.15+	(7.2)	—	ロ・ク	ナデ	ナデ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T330	3-27	R291	瓦 筒	筒	—	1.6+	5.8	—	瓦土積み 上 げ	ナデ、不定方向 ナデ	ナデ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T330	3-28	R293	瓦 筒	筒	—	3.0+	—	—	瓦土積み 上 げ	ナデ	ナデ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T330	3-29	R287	土 瓦	筒	—	3.1+	—	—	瓦土積み 上 げ	ナデ、切ナ、切 ナ	ナデ	赤褐色、白 褐色、黄褐色、 (多)黄褐色	緑色	
NSU T348	3-30	R305	中国産瓦 瓦葺き	瓦	—	0.95+	(2.6)	—	ロ・ク	瓦	瓦	瓦	緑色	小分分製可能

参考文献 ●太宰府市教育委員会2000「太宰府条坊跡X V」 ●小野正成1982「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究」2

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおいたし しなにいせきかくにんちようさがいほう							
書名	大分市 市内遺跡確認調査概報 - 2005年度 -							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	池邊千太郎・塩地潤一・中西武尚・永松正大・佐藤道文・五十川雄也・古川匠・宮田剛・羽田野裕之・姫野久恵							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりかた	な	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
おれともしやかたあと 大友氏船跡第16次		大分市園地町	44201 322051	33°13'48"	131°37'05"	20040517~20060329	320	確認調査
おれともしやかたあと 大友氏船跡第17次		大分市園地町	44201 322051	33°13'50"	131°37'03"	20050511~	700	確認調査
おれともしやかたあと 大友氏船跡第18次		大分市園地町	44201 322051	33°13'56"	131°37'02"	20051206~20060324	60	確認調査
きゅうまんじゅうぢく 田万寿寺地区第1次		大分市大字大分	44201 322052	33°13'38"	131°37'14"	20051101~20060127	388	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第33-2次		大分市大字大分	44201 322052	33°13'21"	131°37'10"	20050214~20060331	450	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第50次		大分市六坊北町	44201 322052	33°13'39"	131°37'01"	20050208~20050210	2	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第54次		大分市錦町	44201 322052	33°14'00"	131°37'12"	20050418	7.2	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第56次		大分市園地町	44201 322052	33°13'46"	131°36'59"	20050601~20050630	76	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第58次		大分市錦町	44201 322052	33°13'50"	131°37'12"	20050711~20050715	210	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第62次		大分市錦町	44201 322052	33°13'52"	131°37'12"	20050920~20060316	48	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第64次		大分市園地町	44201 322052	33°13'54"	131°36'57"	20051116~20051118	153	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第65次		大分市園地町	44201 322052	33°13'55"	131°36'58"	20051124~20051220	9	確認調査
ちゅうせいおれともしやかたあと 中世大友府内町跡第66次		大分市園地町	44201 322052	33°13'50"	131°36'59"	20060116~	48	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第94次		大分市横尾字江又	44201 322158	33°12'01"	131°40'44"	20050105~20050331	210	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第95次		大分市横尾字江又	44201 322158	33°12'02"	131°40'44"	20050126~20050331	110	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第96-2次		大分市横尾字宮田	44201 322158	33°12'04"	131°40'44"	20050126~20050331	90	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第97次		大分市横尾字江又	44201 322158	33°12'03"	131°40'45"	20050131~20050331	290	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第100次		大分市横尾字宮田	44201 322158	33°12'04"	131°40'47"	20050614~20060331	340	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第102次		大分市横尾字宮田	44201 322158	33°12'01"	131°40'48"	20050617~20060331	100	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第103次		大分市横尾字宮田	44201 322158	33°12'07"	131°40'43"	20050622~20060331	140	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第104次		大分市横尾字江又	44201 322158	33°12'42"	131°40'42"	20050627~20060331	385	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第105次		大分市横尾字江又	44201 322158	33°12'04"	131°40'42"	20050608~20060331	160	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第108次		大分市横尾字江又	44201 322158	33°12'01"	131°40'49"	20051108~20060331	110	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第109次		大分市横尾字中スカ	44201 322158	33°12'01"	131°40'49"	20060110~20060331	139	確認調査
よこおいせき 横尾遺跡第111次		大分市横尾字宮田	44201 322158	33°12'02"	131°40'48"	20060127~20060331	42	確認調査
じょうはるきといせき 城原・里遺跡第9次		大分市里	44201 322228	33°37'12"	131°16'34"	20051101~20060328	710	確認調査
にゅうがわかのいせき 丹生川坂ノ市条里跡		大分市丹川・丹生	44201 322235	33°12'30"	131°42'80"	20051115~20060125	1000	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大友氏館跡第16次	居館跡	中世・近世	礎石列・溝状遺構	京都系土師器・在地系土師器・白色系土師器	
大友氏館跡第17次	居館跡	中世・近世	大型建物関連遺構・土師器廃棄遺構	京都系土師器・在地系土師器・白色系土師器	
大友氏館跡第18次	居館跡	中世・近世	溝状遺構・積土遺構	京都系土師器・在地系土師器・スサ入り粘土塊	
旧万寿寺地区第1次	寺院跡	中世・近世	瓦葺まり遺構・大型土坑・溝状遺構	吉備系土師器・京都系土師器・瓦	
中世大友府内町跡第33-2次	集落	中世	掘立柱建物・溝状遺構・欄跡	京都系土師器・在地系土師器・瓦	
中世大友府内町跡第50次	集落	中世	溝状遺構・道路状遺構	京都系土師器・在地系土師器・国産陶器（常滑）	
中世大友府内町跡第54次	集落	中世	整地遺構・柱穴跡	京都系土師器・在地系土師器	
中世大友府内町跡第56次	集落	中世	溝状遺構	京都系土師器・在地系土師器・スサ入り粘土塊	
中世大友府内町跡第58次	集落	中世	竪穴遺構・溝状遺構	京都系土師器・在地系土師器	
中世大友府内町跡第62次	集落	中世	道路状遺構	京都系土師器・在地系土師器・陶磁器	
中世大友府内町跡第64次	集落	中世・近世	掘立柱建物・土坑・集積遺構	在地系土師器・国産陶器(備前焼)	
中世大友府内町跡第65次	集落	中世	大型掘り込み遺構・柱穴跡	京都系土師器・在地系土師器	
中世大友府内町跡第66次	集落	中世・近世	溝状遺構	京都系土師器・在地系土師器・スサ入り粘土塊	
横尾遺跡第94次	集落	古代	土坑	土師器片	
横尾遺跡第95次	集落	古代・中世	柱穴跡	土師器片	
横尾遺跡第96-2次	集落	古代・中世	柱穴跡・土坑・道路状遺構	土師器片・陶磁器・緑釉陶器・円面硯・刻書土器	
横尾遺跡第97次	集落	縄文・中世	柱穴跡	土師器片・白磁片	
横尾遺跡第100次	集落	縄文	ドングリ貯蔵穴群	縄文土器・石器・加工木	
横尾遺跡第102次	集落	縄文・古代	貝塚・集石遺構	縄文早期無文土器片・土師器片	
横尾遺跡第103次	集落	縄文	自然地形	縄文土器片・土師器片・木本類	
横尾遺跡第104次	集落	古代	柱穴跡・廃棄土坑	土師器	
横尾遺跡第105次	集落	近世	柱穴跡・埋喪遺構	土師器片・陶磁器類	
横尾遺跡第108次	集落	縄文・近世	柱穴跡・埋喪遺構	縄文土器片・石器・白磁碗・土師器片	
横尾遺跡第109次	集落	縄文・中世	水田遺構	石鎌・龍泉窯系青磁碗	
横尾遺跡第111次	集落	縄文・中世	水田遺構・自然流路跡	縄文土器片・陶磁器類	
城原・里遺跡第9次	官衙	飛鳥時代	掘立柱建物跡・欄列跡・柱穴跡	須恵器坏蓋・高台付坏・土師器片	
丹生川坂ノ市桑里跡	集落	古代・中世	柱穴・土坑など	須恵器・土師質土器・土埴・貿易陶磁器・瓦器碗	

大分市 市内遺跡確認調査概報
—2005年度—

平成18年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号

印刷 (有) 中央印刷
大分市顯徳町2丁目2-38